
冬の惑星

北海道 札幌市 経営コンサルタント 松尾大生 札幌市 北海道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の惑星

【Nコード】

N2566T

【作者名】

北海道 札幌市 経営コンサルタント 松尾大生 札幌市 北海道

【あらすじ】

余命を宣告された男が四歳の息子と妻を探し命のテーマに迫ります。

一（前書き）

数年前に同サイトで総合1位になった作品です。

街が凍りついていた。

編み笠姿の虚無僧が、アカシア通りを右に折れて、ススキノ通りのネオンの光の中を歩いていた。

その肩越しに、いつものように背中を丸めて客引きをしている顔見知りの姿があった。粉雪に紛れ、輪郭だけ遠くに見えていた。もうすぐ四歳になるのにママとパパ以外、ほとんど話せない健太が周囲を頼りなげに眺めていた。

路面はブラックアイスバーンだった。冷気が霞のようになって、うねるように路面を這っていた。黒い水面を煙が漂っているようだった。足元の霞を掻き分けておれたちはゆっくりと歩いた。熊の縫いぐるみばかりが何十体も並んでいるゲームセンターのショーウィンドウの前でしばらく佇んだ。そのガラスにボサボサ頭で無精髭の伸びきったドカジャン姿の男が色白の子供の手を取り、立っている姿が映っていた。体格のいい中年男だった。この男は、間もなく死ぬらしかった。悪性の脳腫瘍で、医師から余命を告げられていた。再び健太の手を取って二人で漂うように歩き始めた。

粉雪が夜の闇から降りてきていた。ロードヒーティングの入っている回転寿司の前の路面の上方では暖気で舞い上がっていく雪と落ちてくる雪が絡み合って幾つもの白く光る雪の環をつくっていた。回転寿司の看板についているスポットライトが、くると回ると幾つもの環の運動をいっそう白く浮き立たせていた。その向こうに空は見えない。遠くのビルは影絵のようにぼんやりと見えた。電飾版の灯りも、ぼうつと霞んで、自分の周りだけがリアルな架空の影絵の街を歩いているような錯覚に陥っていた。影絵の中を互いに手を繋いだ大きい人間と小さな人間が粉雪の中を歩いていた。

「ママッ？」

突然、健太が叫ぶと、三十前後とおぼしきホステス風の背の高い女がすれ違いざま健太を見下ろした。健太はヤッケのフードを自分で外して

「ママッ」

と再び叫んだ。

女は去って行きながら斜めに身をひねって振り向き、左手で桜色のロングコートの襟を立てながら、右手をその肩先あたりで軽く振った。コートの裾が割れて、形の良い足が覗いた。

長い指を軽く波打たせながら、健太にバイバイと言っていた。背が高く目鼻立ちがはっきりしていた。全体に怜悧な印象なのに三日月の目には愛嬌がこぼれていた。泥臭さは全く無かった。サウナの灯りに照らされ、何度も振り向く健太に同じ姿勢で指を動かしてつづけていた。

おれは嫌がる健太の手を引いて歩き始めた。振り返ると女はまだこちらを見ていた。光が当たった女は影絵の中で唯一の艶めいた生身の人間に見えた。

「本当に綺麗なお姉さんだ。ママにもちよつと似ている。ママ、どこにいったのかなア、早く会えるといいね」

こうした光景の繰り返しがこの一ヶ月であった。気がつくとも通行人の数は増え、周囲が明るくなっていた。大きな通りに出ていた。

「よっ、ぞうさん」

さっきの中年の客引きが背中を丸め白い息を吐いて近付いて来た。太ったヒキガエルといった印象のパンチパーマの男だった。顔中に隈と染みが幾つもできていた。話す時、腹を突き出して、両手を垂らして腕をぶらぶらと揺らす癖があった。

「奥さん、見つかったかい？」

「それが、ぜんぜんなんだわ。手がかりもつかめないよ」

「写真みせてんだべ？」

「これな」

ドカジャンの胸ポケットからサランラップに包んだ写真を取り出した。

「商売人で親切なのはあんたぐらいだア。みんな余裕ないのかな」

「ひでエ不景気だな。殺気だってるのよ」

「随分前からだろ」

「ひと頃の半分も稼げないイ」と語尾を伸ばした。下を向いて手袋を履いた両手をぶらぶらさせている。「そう、そう」ヒキガエルは黒い革ジャンのポケットから、印刷物を取り出した。「若い奴にインターネットで調べさせたんだぜ。凄腕の脳外科の医者がアメリカから帰って来て、今、札幌の病院にいるみたいだぞ」

ヒキガエルから貰った紙にちらっと目をやった。「ミラクルハインド」という文字だけを見て、

「心配してくれてありがとう」

と礼を言った。

「さて」

ヒキガエルは健太の頭をゴツゴツした手で撫でると、「はいお兄さん、今日のエッチのご予定は？」と二人組の若い男達に声をかけていた。

「無駄なんだ」

そう呟いてヒキガエルから貰った紙切れをろくに見ないで丸めてゴミ箱に捨てた。

ススキノの街で失踪した妻を探し始めた頃、しつこく妻の写真を見せるおれに、若い客引きが業を煮やして、

「子連れの浮浪者のとこなんか、誰が戻ってくるかよ」と言った。

おれは浮浪者という言葉に反応して、髪の毛を鷲づかみにして、引きずり倒した。手首をつかみ、腕を後ろにねじ上げ、

「浮浪者じゃない」

と尻を蹴って突き飛ばした。客引きは数メートル走って雪の中に倒れた。しばらくして、同じ客引きが仲間を四、五人連れてあらわ

れた。別の若い男の、拳が飛んできた。鼻に当たらないように顔をずらして拳を黙って頬に受けながら、

「あっちに行つてろ」

と健太に言つて、何か棒きれのようなものを探した。道端に何も見つからないので、

「言つておくが、おれは空手五段だぞオ」

と嘘をついた。数人が殴りかかってきた時、

「警察だあッ！」

と誰かが叫びながら走り寄つて来た。ヒキガエルであつた。

「嘘、うそ、警察うそ」と笑いながら白い息を吐いた。「どうしたのよ」

「この子連れの汚い浮浪者が……」

と若い男が言つた途端、ヒキガエルは男の頭を軽く叩いて、健太を手招きした。

「もう大丈夫だ。父ちゃん強いから」

ヒキガエルは健太を抱き上げて、

「客との喧嘩は金輪際……、お前らも言われてるべや」

若い客引き達はヒキガエルに黙礼するとそそくさと去つて行つた。

「助かった。ありがとう」

「おうっ」

と腹を突き出して、両手を垂らして腕をぶらぶらと揺らし、意味あり気に笑つて消えていった。それから数日後、観光客風の一団に囲まれているヒキガエルを見つけた。

「信用して、お前の案内した店に行つたら、酷い目にあつたんだぞ」
おれは観光客の中に分け入って、怒鳴つた。みんな驚いてこちらを見た。

「そうだ、こいつだ！ この野郎、なけなしの金、まきあげやがつてエ。交番に突き出してやる」おれはヒキガエルの腕を強引につかんで観光客の集団から離れた。「こっちに來い」と蹴りを入れているように見せながら、足早に引きずつた。ヒキガエルの耳元で「逃

げろ」と囁いた。

ヒキガエルはおれの手を力一杯振りほどくふりをしながら、走って路地へと消えて行った。

それから、何かにつけてヒキガエルは親切にしてくれるようになっていた。今日も、わざわざ脳腫瘍に関する情報をプリントして持って来てくれた。その気持ちはありがたかった。

「おおい、ぞうさん」

ヒキガエルは客引きに失敗したのだろう、交差点の反対側から道路を挟んでこちらに手を振っていた。

「写真コピーしておけや。仲間に配ってやるからよ」

ふいに、大きな白い鳥が舞い降りてきて、おれとヒキガエルの間を走る車のすれすれを、飛んだ。そして舞い上がり闇の中に消えた。「カモメ？」おれは訝しげに呟きながらも、ヒキガエルに向かって大声で、「ありがとう」と言った。

ヒキガエルはまた軽く手を振って観光客風の一団を見つけると追いかけて去って行った。

二ヶ月程前、妻が失踪してしばらく経った頃、会社の健康診断で、医師に寝起きの頭痛が酷いと訴えた。他にも色々と質問され、脳の画像検査を勧められた。間もなくMRIを含む精密検査が行われた。悪性の脳腫瘍であった。腫瘍の大きさや、周囲の組織に染み込むように広がっている様子などを画像で見せられた。手術は不可能であり、抗がん剤の投与や放射線治療を勧められたが、治療というより進行させないようにするだけのものだった。命は持って三ヶ月と医師は淡々と告げた。

「どうせ無駄なんですよ？」

と言って説明をつづける医師の話の腰を折り、席を立った。今でも到底自分に起こっている事態とは認め難い。だがそれは現実らしかった。

おれは既に両親を亡くし、妻と健太の他に身内はいなかった。一年半程前に立ち行かなくなった不動産仲介業を廃業して、すぐに小

さな不動産会社に就職した。自分名義、妻名義の消費者金融の借金を整理出来ぬまま、逃げ込むように勤め人に戻った。妻も近所のスーパーでレジの仕事をを見つけ、健太にも無認可だが良心的な託児所が見つかり、一家は再出発をきるかに見えた。親子三人、月に一度はファミリーレストランで食事する余裕ができ、テーブルには永らく絶えていた家族の笑顔が戻った。

そんなある日、おれはファミリーレストランでの食事を終えるとコーヒー片手に妻に言った。

「弁護士を入れて整理しよう。あいつらの金利はべらぼう過ぎる」妻は弁護士という言葉にビクツと反応して、健太の口に運んでいたスプーンの動きを止めた。身体をすばめておれを下から覗き込み、「弁護士って高いっしょ。ブラックリストにも載るんでしょ？ 払えて無いわけじゃないんだから、もうちょつと頑張ってみようよ」「払えているのは金利だけだが……」

おれ自体、毎日の督促に疲れきっていた。前向きな行動に出ようとする命の力すら、萎えてしまいつつあったのである。いわゆる闇金融に妻が手を出してしまったのを知ったのは妻の失踪後であった。十日で二割も金利のつく業者からの督促は苛烈であった。サラキンの金利すら払いきれなくなつて妻は金利を払うためにだけ、馬鹿げた利率の業者に金を借り、そうして消えた。

——ごめんなさい。逃げるわけでは無いけれどこのままじゃ、どうしようも無いから……。少し時間を下さい。必ず連絡します。急いだのだろうか、チラシの裏紙にバランス悪く文字が乱暴に並んでいた。それが居間のテーブルに、そつと置かれておれの帰りを待っていた。

気がつくと、コンビニエンスストアの店内の明かりが歩道を照らしていた。十代後半の男女が街路樹にもたれかかり、身を寄せ合っていた。髪を金色に染めた少年が少女の髪を撫でていた。少女の目は麻薬患者の如く落ち窪み、頬はこけ、虚ろな目線は自分の吐く煙草の煙と反対の方向を向いていた。手前では裏表同じ模様の看板の棒

を両手で持った男が寒そうに足踏みしていた。

前方からやってくる通行人の彩色は徐々に強さをまして、ストアの前に生氣に満ちた人間の集団があられては、過ぎて行った。人通りが多いから今日は土曜日であろうか。そんなことも思い出せなくなっている自分を哀しく思った。光はそだけ現実的な空間を作り出して、粉雪の白、コートの黒、青、赤、緑……、笑い声などを鮮明にした。自分もまた、こうした光の壁をくぐり抜けては、今夜もまた、あてなく妻を探し回らなければならない。健太を抱き寄せて、フードの顎紐を結び直した。無表情に足踏みする男の看板には大きく「カジノ」と書かれており、細かい宣伝文句が並んでいた。文字の背後には様々な色を刷毛で乱雑に交錯させただけの模様が描かれていた。

「大変ですね、立ちっぱなしで……」

カジノの男は軽く頷いただけで何も言わなかった。おれは手のひらにハアツと息を吹きかけて健太の頬に当てた。

「どうさん……」

健太がおれの口に手を当てた。歌ってくれとの合図であった。健太の手を取りゆっくりと歩きながら、周囲をはばかりること無く歌い始めた。

どうさん

どうさん

おはなが　ながいのね

そうよ

かあさんも　ながいのよ

サラリーマンの一团がびっくりしたように道を開けた。ロビンソン百貨店前の交差点を渡り、おれは駅前通りを南下することにした。「悪いんだけど」

美松ビルを過ぎた辺りで若い客引きに声をかけた。サララップ

の写真を差し出して、

「この女、見たことあったら教えて欲しい」

全くの無視だった。商売しか眼中に無いらしい。ひとところの客引きはカモにならない人間にも道を教えてくれる程度の親切心はあったように思う。歩き慣れたこの街が、どこにも行き場のない殺伐とした景觀へと変わっていく。それは街が変わったのか、こちらの心が変わってしまったためなのか。きっと両方なのだろう。

ドラックストアの前で健太を抱き上げた。いつの間にか、健太は笑わない子になってしまった。世間の四歳児はどれくらい話せるものなのだろう。焦点のずれた視線から、障害という言葉が連想された。いつか、ちゃんとした医者に診てもらわねばなるまい。それがいつか。少なくとも妻を見つけ出して健太を託す前であればならない。

「いつかは、無いのかもしれない」

健太の頬に唇をあてて口に出して呟いてみた。胸の芯が痛んだ。

「喧嘩だア」

ヒヤッホーと喚きながら、酔っぱらいの集団が南方向へと駆けて行った。雪煙がうねった。足音が耳に残った。その後ろから数人が足早に過ぎて行った。一人が真うしろに転んで、

「いってェ！」

と呻いた。

東宝公衆会館を過ぎ、ゼロ番地に差しかかる交差点を囲んで人だかりが出来始めていた。交差点の中心には改造された黒いスカイラインが斜めに停車されていた。外国人三人と金髪の日本人一人が、パンチパーマの太った中年男と向かい合っていた。中年男はヒキガエルであった。

ヒキガエルは左眼を腫れ上がらせていた。ジャンパーをたくし上げ、ズボンをまさぐり、どこから短刀を取り出すと鞘を投げた。腰を引いて、両手で前にかざした。微かに青みを帯びた雪煙が、彼等の足元を走り抜けていく。痩せた黒人が雪煙を飛び越えてジャン

プした。短刀を持つ手を蹴った。上手く着地出来ずに転んだ。残りの仲間が奇声を上げて笑った。転がってきた短刀を拾い上げたのはリーダー格の太ったイタリア系の男だった。短刀を持った手でヒキガエルを車の中に入れるよう指図した。小柄だが力の強そうな白人と金髪の日本人がヒキガエルを引き倒した。罵声を上げる彼の両腕を二人で片方ずつ持ち、車の方向に滑らせていく。バタバタと暴れる足が遠ざかっていく。日本人が滑って尻餅をついた。

これだけの観衆がいるのに拉致されようとしている人間を誰も助けようとはしない。おれは正義漢ではない。ヒキガエルは親切にしてくれただけの男だ。腹の底で苦い怒りの束が震えて呻き声となって喉へと漏れた。健太を残して小柄な白人に近づいて行き、

「離さないか」

と彼の腕を強く握った。白人は英語ではないらしい言葉で何やら叫んだ。おれの胸ぐらをつかんでわけのわからない言葉で威嚇しながら歩道に押し返す。そうして……、視界が一瞬、白くなった。凄いい力で殴られた。ススキノ市場の壁に頭をしたたか打ちつけた。白人は引き返して行く。健太が駆け寄って来て、おれの頬に手を当てた。

ビルの壁に据え付けられた屋台の饅頭屋があった。店の中が見えない程の大量の水蒸気が路外に溢れ出ていた。おれは健太を抱き上げた。水蒸気の中に入って行き、積み上げられた蒸籠と蒸籠の間に健太を押し入れて、

「しばらく預かってくれ」

女店員に無理やり健太を抱かせた。「てづくりまんじゅう」と大きく印字されたのぼり棒をコンクリートの土台から抜いた。先端は弱い作りだが根元は太く、両端にプラスチックの蓋がついているのを確認した。ヒキガエルは袋叩きにあっていた。

「馬鹿野郎！」

倒されながらも、車のタイヤを蹴って拉致されまいと、懸命に抵抗していた。バカヤロウの前後に混ざっている言葉が聞き取れず、

動物の吠え声に聞こえた。イタリア系が短刀をヒキガエルの顔の上で、軽く振りながら何か言っていた。おれは真っ直ぐに近づいて行き、のぼり棒の先端を上段から、短刀を持つ手に軽く振り落とした。イタリア系は短刀を落とさず、

「何だ？」

と顔だけで尋ねながら、こちらを向いた。おれは棒の根元を幾分手加減しながら、喉にたたき込んだ。イタリア系は首を押さえて後ずさり、地面に尻をついて、車にもたれかかった。振り向きざまにのぼり棒を大きく横に振った。残りの三人がのけぞった。白人が左手でのぼり棒を払う仕草で、正面から殴りかかって来た。同時に黒人がボクシングの構えで、側面から迫って来た。白人の左手首を棒の先端で打って、棒を引き戻し背後に回った。こちらを向いた白人の喉を突いた。片手を喉に当てながら、のぼり旗を握りしめている白人の髪の毛を鷲づかみにして、顔面に膝を入れた。鼻血を出して地面でもがいている。黒人の拳がおれの顔を襲った。もう本当に気を失いそうになる。ふらついて焦点が合わない。これまでかと観念した時、

「ぞうさん」

ヒキガエルが黒人の後ろからいざり寄って、抱きついて、太腿を短刀で刺す構えをしていた。

「ぞうさんか」

両目が腫れてほとんど見えならしい。切れた唇だけ歪ませて不気味に笑った。ヒキガエルが本当に足を刺そうとしているのを察して目を見開いている黒人の顔を思いきり殴った。膝について崩れ折れた。

「てづくりまんじゅう！」

観衆の中から歓声が響いた。おれはおろおろするだけの金髪の日本人の髪を鷲づかみにした。卑屈に笑っている癖に目に涙を溜めていた。頬を平手打ちして、

「はやく仲間を片付けてエ……消えろ」

五、六人の男が人混みをかき分けて走ってくるなりおれを羽交い締めにした。殴りかかろうとする男をヒキガエルが制して、

「違うちがう。助けてくれたんだ」

息を切らせて走り寄って来た革ジャンパーが暗号めいた言葉を短く叫んで、また走り抜けて行った。ヒキガエルの仲間が一斉に散った。のぼり棒を返して健太を抱くおれに、

「こっちに来い」

と、ヒキガエルが招いた。

すすきの市場の裏の細い通りを走った。路地を右に左に折れた。

大きな通りを南に渡った。そうしてまた路地に入って通路を折れた。

「焼き肉」「おでん」「蔵酒」「ジンギスカン」……、様々な赤提灯や看板の並ぶ、いっそう狭い通りであった。ヒキガエルは誰も見ていないと確認するや、

「ついて来い」

蔵酒のあるビルの地下に潜った。「煮込み　とみ」と暖簾の掛かった引き戸を開けると、

「とみさん、ワリイ……」

「今日は子連れかい？　珍しい」

髪の毛を茶色く染めた老婆であった。

「しばらく店、閉めてくれないか」

ヒキガエルは財布から万札を二枚抜き取り、カウンター越しに握らせた。老婆はいったん外に出てから暖簾を持って戻って来た。鍵をかけて灯りを消した。豆電球だけになる。

「この時間帯はどうせ、暇だからね」

煙草に火をつけて、煙を吐いた。

「二人して、大分やられたもんだねエ。ダンプカーにでも轢かれたかい？　座敷に横になった方がいいよ」

小さなカウンターと狭い座敷だけの店であった。ヒキガエルは座敷に上がるなりテーブルを壁に立てた。上着を脱いで上半身裸になった。

「いやあ、肋骨やられたわ」

辛そうに深呼吸する度に突き出た腹の肉が上下にプルプル動いている。手招きしながら、

「あんたの顔も腫れているぞ、ぞうさん、顔をやられたな」

おれの頬、顎を両手でまさぐった。痛みが走った。

「早めに冷やすのがコツだア」

「おれの名前はぞうさんではないぞオ」

「ぞうさん、歌ってる人だからぞうさんだ」

「あんたはヒキガエルだ」

「ひでえなおい。見たまんまだべや」

座敷に横たわりながら二人とも腹をおさえて笑った。座布団を折って枕代わりにした。寝たまま、健太のジャンパーと手袋を脱がせて、隣に座らせた。薄暗い店内には味噌と生姜の匂いが充満していた。

「タオルと洗面器がいるね。待ってなさい」

カウンターで煙草をふかす老婆は七十歳をとうに過ぎているだろうか。骨と皮だけなのに頭だけ大きい。皺だらけである。見開かれた目ばかりが精気に満ちており、力があつた。老いさらばえたドラ猫。そんな印象を薄灯りと周囲の匂いがいつそう際立たせており、古くから、この地下に巣くっている妖怪といった風情を醸し出していた。

「とみさん、あれで昔は女優だったんだ」

「言わなくていいっての」

嬉しそうに立ち上がり、いたる所にかけてある若い頃の写真の説明を始めた。

二人に無視されて、

「そうそう、冷やすんだったね」

カウンターの中间に戻り、準備を始めた。水を張った洗面器を持ってきた。タオルをぎゅうっと絞って、二人の脇腹と顔に当ててくれた。

「おにいちちゃんにはジュースだね」

と健太に話しかけた。健太は首を横に振った。

「こうやってしばらく横になっていれば楽になる。ポリも消える」
ヒキガエルが言った。

「カミさんの写真出しとけや。本気で捜してやる。もうじき仲間が来るからよ。コピーでもしてばらまけば」少し間を置き、「二時間……。本当にススキノで働いているなら、二時間で割り出せる」

「おれは一ヶ月歩きまわった」

「蛇の道はヘビだ。客引きのネットワークをなめるんでないぞ」

「助かる」

「ぞうさん」

「なんだ」

「なんで俺を助けた？ 体、張ってよ」

「もう、助からない命なんだ」

「はあっ？」

「医者にも見離されている。どうせ亡くす命なら、人の為にとって、おれみたいなものでも最期が近いとな、……。そんな心境にもなるものさ。あんたは、生きていけるんだ。命は大切にしろよ」

「ぞうさん」

店の扉を外から叩く音と同時に、暗号めいた早口言葉が聞こえた。老婆が鍵を開け、ヒキガエルはおれから写真を受け取り、若い男に短く説明してから、また苦しそうに横たわった。

「少し、寝ろ。俺は寝る」

ほどなく、寝息が聞こえ始めた。

「健太も寝な。パパも寝るから」

と頭を撫でた。夢を見た。幼い頃から繰り返している夢のパターンであった。

南国だった。青く澄んだ空の下、おれは家族と談笑していた。ホテルか何かのバルコニーであった。一部分が海面まで突き出した、木材で組んだ造りだった。足下には、波打っている海面が見えてい

た。妻も健太も果物を口にしながら、うれしそうに笑っていた。おれもまた、家族そろっての食事に、うきうきするほど気持ちを踊らせていた。ふと下をみると木と木の隙間から海の底に人間が上向きに沈んでいる姿が見えた。腐乱した女の死体だった。顔は原始人のような印象だった。鼻が低く、鼻孔が異常に膨らんでいる。髪の毛の長い死体であった。不気味に思っ、おれは二人を連れて海の上に架けられた細く長い橋を渡って、その場を去ろうとする。橋を渡れば、別の街があるような気がした。橋を歩いて行くと前方に大きな蛇がとぐろを巻いて顔だけこちらを向いて睨んでいた。黒ずんだ嫌らしい顔をしていた。大きな蛇の周囲には無数の小さな蛇がうねっている。おれたちは橋を渡れずに引き返した。

場面は変わり、妻の故郷におれたちはいた。妻は天売島出身だった。天売島は日本海側の小さな島である。幾十万もの海鳥が頭上を飛び交っていた。夕暮れ時であった。おれたちはウトウの巣穴を避けながら断崖縁を歩いて行く。気がついたら、妻はいなくなっており、おれと健太は、ススキノの街をいつものように、手を繋いで歩きつづけていた。空だけは相変わらず天売島のままだった。夕暮れのススキノの上空に、無限の海鳥が溢れていた。空を覆っていた鳥達は光を発し始め、夜の空を狂おしく乱舞した。それがいつの間にかビルのネオンとひとつになり、海鳥は夜の光となった。

「ぞうさん」

夢から覚めた。老婆がおれを揺り動かしていた。老婆の顔が夢の中の死体の顔と重なり、思わず息をのんだ。幼い頃から、地下室に死体を隠して、いつ発見されるかと、びくびくしている夢を繰り返して見えてきた。地下室は、時に地中になったり、屋根裏部屋や海の底にもなった。死体を隠して戦慄しているパターンは、いつも同じだった。おれは一体誰の死体を隠していたのだろう。その自分が今、死んで逝こうとしている。そして夢の中に出てくる死体イメージとそっくりな老婆と向かい合っている。これは偶然なのだろうか。

「起きたようだね」

「妙な夢を見た」

「どんな？」

「あんたが出てきた。おばさん、……どうして地下室なんかで店をやってるんだ」

「地下室？　ここは地下の店だけど、地下室なんかじゃないよ」

「悪い、ねぼけてた」

起き上がった。カウンターでは、ヒキガエルが既に起きていて、若い男と話をしていた。

「随分ぐっすり、ねむっていたな」こちらを向いて笑った。「奥さん、みっかったぞ」

「本当か」

「ここで働いている」座っているおれに紙切れを手渡した。

「女が身売る店だ」

「売春してるのか」

こちらの眼を真っ直ぐ見つめながら、「そうだ」

と低く呟いて灰皿に視線を落とした。

カウンターの内側の大きな鉄鍋から、蒸気が天井へと膨れ上がっていた。老婆が換気扇をつけると、蒸気は渦を描いて吸い込まれていく。もの静かな店内に換気扇の音だけが、せり上がるように響いていた。ヒキガエルの吸う、煙草の煙が目沁みた。おれは自分の死、すら受け入れようとはしない人間だ。妻が売春している？　話としては呑みこめても、怒りの感情も羞恥の念もわいて来なかった。ただ、想いは換気扇に吸い込まれていく蒸気のように、あてどなく流れていくばかりだった。健太が寄って来て、横にそうっと坐った。不思議そうに大量に湯気の上がっている鉄鍋を見つめていた。

「食べるかい」

老婆は鉄鍋の中の煮込みを小ドンブリに浅く盛って、カウンター越しに差し出した。

おれがドンブリに口を当てて汁を飲み込もうとすると、

「そこまで」と、老婆はドンブリに目を凝らした。「脳腫瘍なんだ
って？」

「もって三ヶ月といわれてやつでエ……」

「死ぬんだね」

「はい」

とみさん、いい加減にせいや、と止めるヒキガエルを制して、

「あたしは、だてに何十年も地下でホルモンを煮込んできたわけ
はないよ。今、あんたが口をつけたドンブリの、ほら、そこ、欠け
ているだろ？　あたしが食器をケチって、そんな欠けた碗をつかつ
てると思ってるかい？」

よく見ると確かにドンブリの縁には一箇所、小さく欠けた部分が
あった。おれはそこに、無意識に口をつけて汁を啜ろうとしていた。

「また、とみさんのドンブリ談義だア。それどころでないべさ」

ヒキガエルが苛立たしげにタバコを灰皿に揉み消した。

いいから、いいからと、なだめながら老婆はつぶけた。

「世の中、景気の良い年、悪い年、色々あったけどね、五年、十年
って通ってくれた常連もいてね、そうなりやアンタ、もう身内みた
いもんよ。仕事のことやら、夫婦仲のこと、ヤバイ話もあったね。
何でも人生相談屋のとみさんさ」

「地下にあるから何でも吐き出しやすかったんだろう」

ヒキガエルがぼつんと言った。

「長い間には成功した人もいたし、反対に運に見離されて落ちてつ
た人もいた。高慢で意地悪な人間は、いつとき成功しても長続きし
ない。あたしは悟ったね。人間の根性ちゅうか、心、ハートが善い
か悪いかで人生つくられていくってね。あたしは、お客さんに教え
られたね」

「とみさん、どんぶりの話はどうした」

ヒキガエルを見る老婆の眼が光った。

「例えば商売も健康も何もかもうまくいっていて本人もそんなふう
に思い込んでいるお客さんが来る。欠けた所に無意識に口をやる。」

あたしはピーンとくるんだよ。そんなお客さんに限って、しばらく店に来ないと思ってたらあんた、自殺したのだ、保証人になって破産したのだ、実は癌だったのだ……」

「おれは口をあてる前から脳腫瘍だって知っていた」

「順番は関係ない。病気も関係ない。心の奥に欠けている部分があると、そこにどんぶりの欠けている部分を引き寄せられる。そうして不幸を予告するんだ。ところがその反対のこともあるから世の中、面白いのさ。逆に不幸のどん底にいるホステスなんかがそこに口をつけるだろ？ ああこの人はもう大丈夫。心配無いつて確信するわけさ。不思議なことに実際、その通りになる。幸運に変わる予告もするんだな。あたしはだてに何十年も人を見てきたわけじゃないんだよ。あんたの病気はきつと治る」

後ろの壁に飾ってある写真を指差した。

「昔の絶世の美女も年取ったら婆さんになる。ところがあんた、ある日やって来たらカウンセラーに立っている皺くちやババアがもとのお姫様に戻っているようなお伽話が実際起こるから面白い」意味あり気に笑った。

「この女優、おばさんなんだな。いつか見たような気がする」

「古い映画で観たんだろ」昔の美女は自慢気に胸を張って「困ったらいつでもおいで。早い時間帯はお客さんいないから」

ヒキガエルが立ち上がった。

「いくべ」

「つきあってくれるのか」

「どうさんひとりじゃ、ちょっとヤベエ場所だな」

そう言うなり店を後にした。老婆に礼を言ってから健太を連れて地上に出た。

一カ月ほど、歩きまわって見つけれなかった妻の消息が、一人の客引きとの不思議な邂逅によって、開けつつある事実には、おれは戸惑いを隠せなかった。もとをただせば、不動産会社の元同僚から住まいに電話があったことが発端であった。

——あんたの女房がホステスみたいな派手な格好でススキノを歩いていた。

たったそれだけの言葉をよりどころとして、この一カ月余り、健太とともに、ススキノを彷徨いつづけてきた。暦は二月から三月に変わり、夜の空気に春の訪れを感じ始めていた。冬と春との攻防は一進一退を繰り返し、今夜はいっそう、酷く冷え込んでいた。

ヒキガエルは手をブラブラさせて歩きながら、「ぞうさん、仕事辞めたって言っていたけど、ゼンコはどうしてんのさ」と訊いてきた。

「昔、世話になった広告屋で使ってもらってる」

「広告屋？」

「スーパ―なんかでよくアドバルーン上がっているっしょ？ アドバルーンの見張りをやってるんだ」

「妙な仕事だな。健太はどうしてんのさ」

「預け先が無いから、親方の許可もらって、現場に連れていってるのさ」

「して、夜は毎晩ススキノかい。ねぐらは、どうしてんのよ」

「平和の滝の方に平和湖っていう湖ちゅうか、でかい池があるの知ってるかい？」

「平和の滝なら行ったことある」

「平和湖のすぐ手前に廃業したジンギスカン屋の古い建物があるんだわ。家というより小屋みたいなもんだけど、そこをアドバルーンの親方が工場として借りてんのさ。そこに住まわせてもらってる」

言葉を交わしながら、健太の手を取りつつ、暗い胸の内ではこの一カ月の様々な場面が走り過ぎていった。コンビニでカップラーメンを買って湯を注ぎ、ビルとビルの隙間で二人で麺を啜った夜。暖をとるために入って、何もしないでいて店員から「出て行ってくれ」と言われたパチンコ店での夜。寒さに耐えかねて、ビルの地下の便所に入り、ドアを閉めて便器の横でうずくまり抱き合ってた夜。夜夜夜。

「病院にはかかってんだべなア？ 健康保険なんかはどうしてんのよ」

ヒキガエルの言葉で我に返り、

「会社の継続のやつ入っていたけど、保険料、払わなかったら切られた」

「したら、病院に行っていないのかい。まあ、わやだなア、おい」

「死ぬ時は死ぬ。もう、近いんでないかい」

しよれはないっしょやア、と呟きヒキガエルは両手をポケットに入れて立ち止まった。「奥さんに健太手渡したら、死んでもいいってかア」と怒気を含んだ声で言った。

「妻に健太わたしして、仕事も出来無くなったら、そりゃ、死ぬしかないさ」

歩き始めたヒキガエルを追って肩に手を置き、

「あんただって何時かは必ず死ぬんだぞオ。現にさっき死にかけていたべさ」

「おう、下手こいたら大浜で海水浴してたべな」そうしてポケットに手を入れたまま凍った歩道で危うく転びそうになりながら一回転して見せ、振り向きざま気取った表情で、「それもこれも、商売のうちだでや」と微笑んだ。

風俗店の群集する通りに差しかかった。それぞれの店の前では、呼び込みたちが、防寒着で身を包み、通行人に声をかけては無視され、無視されてはまた声をかけていた。呼び込みに成功して、二名様ご案内、と体を揺すって小さく叫んでいる男もいた。

粉雪はネオンの光を受けて、通りの中をねじれながら渦巻いでいた。この通りだけアスファルトにロードヒーティングが入っており、黒い路面の所々に薄い水溜りが出来て、色とりどりの光を映しては変化していた。歩いていくにつれ、ネオンの光は水溜りの中で、また別の光の配色を幻のように映していた。それは、こちらの動きで自在に移り変わる眩く妖しい光の流れであった。おれは何か不思議な映像でも見るように立ち止っては、また歩いた。健太が前方の水

溜りで、軽く跳ねて遊んだ。煌めく映像が、長靴の波紋で揺れて、変化した。

「こっちだ」

ヒキガエルの太った猫背が、通りを左に折れた。路地を何度も曲がった。ヒキガエルは古い三階建ての細長い小さなビルを指差して、両手をポケットに入れて、足踏みしながら、

「ここ」

と顎だけで指し示した。確かに鉄筋造りのビルの筈なのに、木造の建物の外壁だけコンクリートを打ちつけて、騙しあげたような、薄汚れたビルであった。うながされるまま、二階に上がった。廊下で「Sugar 倶楽部」という電飾の看板が、赤く青く点滅を繰り返している店であった。ドアは開け放たれており、中から何かボサノバラしい音楽が響いてきた。艶めいた声の女性ボーカルであった。「連絡した者だ」

ヒキガエルは受け付けの若い男に手短かに告げると、男は食いかけのコンビニの弁当を電話の横に置いて口尻を指で拭いつつ、

「黒川さんとこの方ですね」とだけ言って、「こっちでお待ちください」と薄暗い店内に案内した。

男は音楽を消し、照明を調整して店内を明るくした。ミラーボールの光と真っ赤な布を壁一面に張り巡らせているだけの狭い店であった。赤い布は所々、破れたり穴があいたりしていた。店内には誰もいなかった。カウンターは無く、ただテーブルと椅子が幾組か置かれていてだけの造作であった。――そんな印象なのに幾重にも重なって一つになった香水の匂いばかりが鼻についた。それは、古臭く小さいミラーボールや、穴のあいた赤い布を、いっそう頼りなげに貧相な様相として映し出していた。

「客が来たらどうすんのよ。照明落とせや。弁当食ってる暇があったら一人でも客連れてこいや」

受付の奥から異様に背の高い痩せた男があらわれた。同時に女たちの嬌声も聞こえて来た。

「やまぐちィ」

と怒鳴られて、受付けの男は慌ててジャンパーを羽織ると、店の外に出て行った。割り箸が床に落ちた。

背の高い男は照明を薄暗く調整し、再び有線放送らしいボサノバを低い音量でかけ、スイッチを入れてミラーボールを回し始めた。店内の雰囲気が一変した。さっきまで単純で貧相な造りであった筈の店内が、その単純さ故に、ミラーボールの回転する光に照らされて、奇妙な扇情的な空間へと変貌を遂げた。

「いやあ、久し振りです。黒川の兄さんには何時も世話になりっぱなしで」

男は笑顔に媚びを込めつつ、細い体を折り曲げて頭を下げた。

「なんもだ。こっちこそ、最近、収穫無くて迷惑かけてるさ」

ヒキガエルが立ち上がったので、おれも席を立て異様な男に頭を下げた。

男の目線は、おれやヒキガエルより十センチは上にあつた。百九十センチはあろうかと思えた。

自分の手足の長さを意識するかのように、ヒキガエルと話しながら大袈裟な動作をスローテンポで繰り返していた。ミラーボールに照らされて、男の影がぼんやりと赤い床に映し出されていた。その影から、人間のものではない、奇怪な生き物の姿が連想された。

蜘蛛男。

確かに、床に映る極彩色に回転する光の中に映し出された不気味な影は、手足の長い大きな蜘蛛のような形をしていた。愛想よく笑う男の横顔と、不気味に蠢く影の形を見比べながら、ひよっとすると床に映し出された蜘蛛の姿こそが、この男の本性なのではないかと考えていた。

おれは懷からサララップの写真を取り出してテーブルの上に置いた。

同時に蜘蛛男の胸から携帯電話の呼び出し音が響いた。厳しい表情へと豹変し、

「なにイ。泣いているだア。そんなの話にならんべや。自分で選んだ仕事だべ」そうしておれの顔をふいに見て気がついたようにヒキガエルにウィンクして、「インターフェロン打っつけや。最初が肝心だからよ」携帯電話を切り、写真を手に取った。

「ゾウさんの前でインターフェロンは洒落にならんぞ」ヒキガエルが笑った。

蜘蛛男は首を傾け、「なんだ、ちさとさんだ」と写真をテーブルに戻した。「ちさとさんなら今日は珍しくお休みしてます。明日は出てくる筈ですけど……」

「ここではちさとと名乗っているのですか」

「本名で仕事している子なんて稀にしかいませんよ」

S u g e r 倶楽部のビルを後にして、駅前通りの方向へとヒキガエルは歩き始めた。

「ほとぼりさめるまで一週間は商売にならん」

と言って歩調を早めた。

客引き殺すにゃ刃物はいらね、ポリの三日も出ばりゃあいい、……てかア、と叫んで、路面に大量の唾をはいた。唾は雪の中で赤みを帯びていた。

「俺はここで消える。明日、同じ時間にさっきのビルの前で待っててや」

「親切だな」

「商売になんないしな。この際、あんたに付き合うわ」

パチンコ店の自動ドアが開いたり閉じたりしていた。暖気がその度に、路外に溢れだしては、風に吹かれて消えていった。手を上げて爪先立ちで伸びをして暖気をつかみ取る仕草をしながら、ヒキガエルは、

「平和の滝の方だったらお前、もうバスないべや」

と寒気に片目を閉じて顔をゆがませた。

「車だア」

と答えるおれを残してヒキガエルは群衆の中へと消えていった。

去って行くヒキガエルの肩先あたりに、虚無僧の編み笠姿が見受けられた。虚無僧は、何やら、ビラを配りながら、パチンコ店の前まで歩いてきた。羽織っている黒い防寒着の前は開け放たれており、帯には尺八が挟まれていた。尺八の先端が「明暗」の文字と重なり合って揺れていた。

虚無僧は、青い大きなビラをおれに差し出した。受け取ろうとしないので、無視して通り過ぎて行こうとした。思い立ったように立ち止まり、編み笠を傾げて健太の頭に手を置いた。そうして、ビラを受け取ろうとしないおれに、さらに青い紙を差し出した。ほれっ、と顎を突き出しているのが編み笠の動きで判った。不気味なものを感じて、おれは怖くなって仕方なくビラを受け取り、無造作に丸めてドカジャンのポケットに入れた。

雑踏の中、明日の妻との再会だけを頼りに歩きつづけた。期待と焦りが、粉雪にまみれる街のネオンのように、胸の内でも、点灯していた。それが明日、終止符を打たれる。こみ上げてくる深い安堵の念を、青い雪煙が更に包みこんでくれるようであった。

地下鉄を乗り継いで、地下鉄学園前駅で下車した。エスカレーターを上って行くと、そのまま、ある学園の構内に出た。学園内の高校の教員をやっている同級生が、夜は使わないからと、自分の駐車スペースを、空けておいてくれていた。

高校の生徒通用口の横に、大きなブロンズ像が置かれており、それは名のある彫刻家の手によるものらしかった。おれはいつものように、頭や肩に雪をかぶって腕を肩まで振りかざした、縮れ毛のブロンズ像を見上げた。それから、カローラのドアに鍵を挿し込んだ。「わだつみ像」は、台座を入れるとニメートル以上、高さのある、全裸の、若く逞しい青年の像であった。筋骨隆々でありながら、若さ故のしなやかさをも内に秘めた繊細な印象を醸し出していた。

「君は、生きるという一点だけを見つめて、そこに立っているんだなァ」

と、呟いてみた。わだつみ像は、何も応じ返してこなかった。

二（前書き）

追憶

二

北一条通りに出て、西野二股を右に進んでしばらく走ると、周囲はもう山の中だった。緩やかな斜面に出来た住宅地を更に上ると、平和霊園があり、その奥に平和湖がある。

平和湖に下りていく小さな崖ぎりぎりの場所に、その木造の木肌をむき出しにしたオンボロ小屋は建っていた。昔は旨い羊肉を食わす店として、場所の奇抜さもあり、繁盛していたジנגイスカン屋であった。春から秋にかけては、平和湖にボートを浮かべて、時間あたり幾らで金を取っていた時期もあった。その後、経営者の高齢化で、「札幌気球有限公司」に工場兼事務所として、貸し出したのである。「平和湖畔荘」と赤いペンキで平屋の屋根に載せられた大きな看板は、ところどころ雪をかぶり、ペンキも剥げて、斜めに傾いていた。小屋の中は、板張りの大広間と、一段高い位置に八畳間の座敷が一室、それだけの造りであった。灯りをつけて、板張りの広間の真ん中に置かれた、昔風の丸い石油ストーブの元栓をひねった。電源を入れてしばらくしても点火しないので、いつものように舌打ちしながら、足元に落ちていた新聞紙をちぎり、ライターで火をつけて、ストーブの蓋を開けて炎を放り投げた。

奥の壁一面には、何十個ものカラーボックスが天井近くまで積み上げられていた。そこに畳んだアドバルーンや、ロープや網等の道具類が、雑然と押し込められていた。そのすぐ手前には、中古の事務用机が、縦に六つ並べられており、その上にコンパネを敷き詰めた細長い作業台が出来ていた。

座敷では健太が敷きっぱなしの布団に坐り、ダンボールから取り出したカップラーメンの包装を器用に剥がしていた。おれは、広間の台所で薬缶に水を汲んでストーブの上に載せた。

「待ってろな」

積み上げられたヘリウムガスのボンベに腰を落とした。気がつい

て靴を脱いで座敷に上がった。扇風機に似た円形の大きなハロゲンヒーターのスイッチを入れて、健太のヤッケを脱がした。おれもヒーターにあたりながら、ドカジャンを脱いだ。

「まだ寒いかな」

健太の肩を抱き寄せた。健太は包装を剥がしたカップラーメンの蓋を半分開けて、小さな冷蔵庫から、生卵と納豆のパックを、二つずつ取り出していた。布団の横の円い卓袱台に置いた。おれも、ダンボールからカップラーメンを取り出して、包装を剥がして、蓋を半分開けて健太のカップの横に並べた。

「今日は冷えるな」

ハロゲンヒーターの電圧を上げて、再び健太の横に腰を下ろした。二人とも、布団の上に坐り、ハロゲンヒーターの熱を受けていた。赤く反射するハロゲンヒーターの中には、これも、いつものように老婆の顔の模様があらわれていた。

この小屋に越して来て間もなく、おれは何日捜しても一向に手がかりの掴めない妻の消息に苛立って、茶箆筥から親方の焼酎の瓶を取り出して、ジョージアで割って飲んだのだった。何かの拍子にむせかえって、おれは口の中のことを思い切り、ハロゲンヒーターの方向に吹き出してしまった。液体が霧状に空中を舞った。

以来、ハロゲンヒーターの丸い反射板全体には茶色の染みが、無数に点々と、こびりついていた。いつからか、電源を入れると、染みの中から人間の顔の模様があらわれるようになっていた。よくみると、それは老婆の顔だった。目を釣りあげ、口を大きく開き、怒っているとも、悲鳴をあげているとも判別出来ない顔だった。笑っているようにも見えた。時には泣いているようにも見えていた。健康保険が切れる前、健太が風邪を引いたので近所の内科に連れて行った。診察後、ついでのようにして幻覚のことを医師に訊いた。自分が脳腫瘍であることは黙っていた。

「幻覚には間違いないのですが、おれの頭どうかしているのでしょうか」

すると医師は、

「それはパレイドリアと呼ばれる現象で、よくあることですから、気にしなくて結構です。幻覚の内にも入りません」と、こともなげに不安を一蹴してくれた。そうして「脳疾患などあれば別ですが」と付け足した。

「脳疾患？ たえば脳腫瘍で幻覚はおこりますか」

「もちろん、出来た部位によっては……。なにか心配なことがあるのですか」

「……………」

日数の経過とともにハロゲンヒーターの中で、老婆の顔は次第に鮮明になっていった。幻に決まっているのに、健太にまで、

「お婆さんの顔が見えるか」

と、ハロゲンヒーターを指差して尋ねたこともあった。無論、健太にはなにも見えないらしく、首を横に振っていた。赤く点る丸い電熱線の背後で、不気味にあぶり出された老婆の顔……。それは目を凝らして見つめれば見つめる程、鮮明になった。

「ババア、今日も帰ったぞ」

声に出して呟いてみた。今では健太も慣れてしまつて、おれがハロゲンヒーターに話しかけると、自分は見えていないはずの老婆と一緒になつて「バ、バ」と声をかけるようになっていた。

二つのカップラーメンにいつも通り、納豆と生卵をそれぞれぶち込んだ。ストーブから薬缶を持って来て湯を注いだ。茶箸筥の横には、ダンボールが二つ置いてあり、一つにはカップラーメン、もう一つのダンボールにはジョージアが何十本か入っていた。どちらも、親方が買い置きしている物だったが、好きなだけ食べても飲んでもいいと言われていた。納豆と生卵は自分で買っていた。

「そろそろかな」

老婆の顔にちらりと目をやってから、カップラーメンの蓋を開いた。健太は自分の手の大きさには似つかわない金属のフォークを器用に使つて食べ始める。おれも割り箸を割った。

「居所がわかったゾ」

麵に息を吹きかけながら、おれはハロゲンヒーターに話しかけていた。

「売春してるんだってよ。たまらないイ」

横からは麵をすすする音が気持ち良く響いていた。明日、妻に会って事情を話せば、全て終わると思った。自分は借金でクビが回らない上に、不治の病に侵され、幻覚が見える狂人である。ハロゲンヒーターの丸い反射板一杯には、今も老婆の顔が鮮明に見えている。それは見つめれば見つめる程、不気味に顕在化する確かな映像であった。健太が勝手しつたる様子でハロゲンヒーターの首振りボタンを押した。老婆はゆっくりと、左右に首を振り始めた。網のカバーを外して、汚れを拭き取ってしまえば、もう老婆はあらわれないだろうか。それは無理だというように、老婆はクビを左右に振っていた。

「ババア、あんた、おれの中に昔から居なかったか？」

今日、地下の煮込み屋で見たどんぶり談義の好きな女主人の顔と、ハロゲンヒーターの中の老婆の顔がまた一瞬、重なって見えた。

「医者が駄目だってもんを、あんたの病気は必ず治るだなんて、とんだオタメゴカシぬかしやがってよオ。クソババア……。んなもん、お前、治るわけないべや」

今度は、女主人がクビを左右に振っていた。生気に満ちた目が、心配ない、心配ないと言っていた。おれは、割り箸をハロゲンヒーターに思い切り投げつけた。

「馬鹿にすんなや、このキチガイ猫が！」

自分の口から出た、キチガイ猫という表現が可笑しくて、大声で笑った。煮込み屋の女主人は、確かに、老いさらばえたキチガイ猫であった。

「年寄りのキチガイ猫が、お姫様に戻るかよ。したらお前、おれだって、死ななくてすむべや。お伽話もタイガイにしてくれや」

なぜか無性に腹が立って、おれは卓袱台を持ち上げて、ハロゲン

ヒーターめがけて投げつけた。卓袱台は斜めに転がりながら、ハロゲンヒーターの網の端に当たった。ハロゲンヒーターは、ぐらついただけで倒れなかった。カップラーメンの麺と汁が畳にぶちまけられていた。健太が四つん這いで、おれから逃げ出した。その丸い尻を目で追いながら、

「ごめん、ごめん、びっくりさせたな……」

健太を抱き上げて謝った。無表情で頷いてくれた。

「お前が勝手なことばかり言うから、健太の飯が無くなったではないか」

とハロゲンヒーターに向かって叫んだ。老婆は顔の向きを変えながらも、それは違うとクビを左右に振りつづけていた。健太が広間から、新聞紙と雑巾を持って来た。健太と一緒に畳の床を掃除した。健太のカップラーメンは、カップの中に麺と具だけが、まだ半分ほど残っていた。健太は黙って卓袱台にカップラーメンを置いて、つるつると食べ始めていた。

床に脱ぎ捨てられたドカジャンにカップ麺の汁が飛び散っていた。広間の天井に張り巡らされた物干しの針金から、新しい雑巾を一枚おろして、薬缶の熱い湯を染み込ませた。ドカジャンをハンガーに掛けた。ポケットから、青色の紙屑が畳に落ちた。染みにならないようにドカジャンの汚れを雑巾で押すように何度も拭いた。ハロゲンヒーターを蹴り倒し、電源を抜いた。

「くたばったか、ババア！」

というなり、ハロゲンヒーターに唾を吐き捨てた。唾は傾いた反射版に落ちて、しゅっと音をたてた。老婆の顔は消えていた。

「なんだべ」

畳に捨て置かれたクチャクチャの紙屑を拾いあげた。卓袱台に広げてみると、ワープロで、英文がしたためられていた。その後に和訳がついていた。「病者の祈り」と題された詩であった。

大きなことを成そうとして

強さを与えて欲しいと求めたのに
謙虚さを学ぶようにと
弱さを授かった

偉大なことができるように
健康を求めたのに
尊いことができるようにと
病弱を与えられた

幸福になろうとして
富を求めたのに
知恵者であるようにと
貧しさを授かった

人々の賞賛を得ようとして
権力を求めたのに
天狗にならないようにと
弱さを授かった

人生を享楽しようと
あらゆるものを求めたのに
あるがままを喜べるようにと
いのちを授かった

求めたものは一つとして与えられなかったが
願いはすべて叶えられた

本当の自分自身の意にそぐわぬ者であったのに
こころの中の言い表せない祈りは
すべて叶えられた

私はあらゆる人々の中で
最も豊かに祝福されたのだ

詩の後に解説がついていた。ニューヨークのリハビリテーション
研究所の壁に書かれた、一患者の詩であり、作者は不明である旨が、
記載されていた。長々と解説の文章がつづいていたが、飛ばして読
んだ。最後に「翻訳・虚無僧」と印字されていた。英文と和訳を見
比べてみた。英語は苦手だったが、最後の、「神の意にそぐわぬ者
であったのに」の「神」の部分を虚無僧は「本当の自分自身の意に
そぐわぬ者であったのに」と置き換えて翻訳しているのが判った。
「意識にも限度があるぞ」

おれは虚無僧の翻訳に卑怯なものを感じて、用紙を卓袱台に放り
投げた。

「だいたい『本当の自分自身』って何のことよ」

と舌打ちしながら、見覚えのある詩だな、と考えていた。記憶の
糸を手繰り寄せて、卓袱台に頬杖をついた。過去へと感慨を張り巡
らせていた。

母が亡くなった時、病院の廊下に張り出されていた詩であった。
母は、おれが大学四年生の夏、胃癌で死んだ。四十五歳だった。父
はおれが高校一年の冬、やはり癌で死んでいた。今のおれの歳と同
じ、四十歳であった。夜の病院の薄暗い廊下の風景が、胸の痛みと
ともに、青白い光芒を曳いて、脳裏に蘇ってきた。

夕方、病院から電話で母の危篤の知らせを受けて、おれは平和の
自宅から、タクシーを拾い、中央区の病院へと駆けつけた。看護婦
が母の顔に白い布をそつと置いた。おれは詫びながら布をゆつくり
とおろして、母の死に顔を凝視した。痩せて、黒ずんだ骸骨みたい
な死相であった。目は見開いたままであり、口も半分開いていた。
おれは何度も母の臉を指で撫でて、ぎょろりと空中を見つめたまま

の目玉の入っている二つの眼窩を閉じてやろうと試みた。その作業は幾度やっても徒労に終わった。

「あと、頼みます」

布を母の顔に戻すなり、頭を下げて、病室を飛び出した。しばらく、廊下でうずくまっていた。突き当たりの窓ガラスから、向かいのビルの電飾版の光が、磨きこまれた廊下の床を、黄色く赤く明滅させていた。廊下に照り返り瞬くその不思議な光を見つめているうちに、正気を取り戻して、エレベーターへと歩き始めた。母の死は覚悟が出来ていた。おれが打撃を受けたのは、むしろ、母の死に顔の醜さであった。立ち止まり、廊下の壁に何度も頭をぶつけながら、母の醜惡な死相を反芻していた。目を開くと、貼り紙があり、そこに「病者の祈り」があった。消毒液の匂いが鼻をついた。「病者の祈り」から、おれは何ものも感得すること無く、

「ふざけるな」

と呟いて病院を後にした。

足はススキノの方向へと向かっていた。母の死を知らせねばならない身内が自分には一人もない事実に愕然としていた。とうてい自宅に戻る気持ちになれず、歓楽街の雑踏を求めてススキノまで足早に歩いた。

ヨーク松坂屋の正面玄関の石段に一人で坐っていた。街の光彩に包まれながら、何人ものチラシ配りが、おれの周囲でうろうろしていた。歩道に捨てられた無数のチラシが、夏の乾いた風に巻き上げられて、砂埃と一緒に宙を舞っていた。豊平川の方角から花火の音だけが聞こえてきていた。

無性に誰かと話したくなって、目の前の公衆電話のボックスに入った。ススキノからほど近い、おれの大学と同じ学園の中にある商業高校の一年生の女の子と知り合ったばかりだった。すでに何度かデートしていた。彼女は通っている商業高校の裏手にある女子寮に住んでいた。女子寮に電話すると、管理人のおばさんが出た。喉仏を押さえて、声色を太く変えて、

「天売島の親類の者だが、長距離なので急いでくれないか」と嘘をついた。間もなく彼女が電話に出た。

「お兄ちゃんでしょ」

「よく判ったね」

「だって天売に親戚なんて爺ちゃんしかいないもの」

「出てこられないか」

「どこ」

「ヨークの前」

「ランボルギーニで飛ばして行くね」

二十分も経過しないうちに彼女は現れた。ツーリングタイプの自転車に乗って、長い足をすらりと地面につけていた。

「お兄ちゃん」

うなだれているおれの頭を叩いた。見上げると、白いティーシャツにストレートのジーンズとスニーカーだけのシンプルないでたちであった。

「そのランボルギーニ、卒業生からのお下がりだろ？」

すると彼女は鼻筋に皺を寄せて笑い、

「お兄ちゃん、このランボルくん、転がしてみる？」

彼女はいたる所、塗料の薄れた自転車から降りた。おれは入れ替わりにサドルにまたがった。

「このランボルギーニ、ブリヂストンのユーラシアだろ？　よく足とどくな」

「さア、発進」

手を振り上げて、彼女は荷台に飛び乗った。

「つかまって」

と後ろを振り向くと、彼女の顔は青白く、艶めいて見えた。瞳の色は、濃い緑色であった。それは光の加減で、青色や黒に変化した。

「飯くった？」

「くった」

「花火観に行くか」

「いくか」

おれはペダルを蹴って走り始めた。車や通行人を縫って、歓楽街を疾走した。行き交う車の列に映し出されるネオンの光が、濁流のように流れていた。

気がつくとも、健太が畳にうつ伏せになって、フォークを握りしめたまま、寝息を立てていた。力の入ったままの手からフォークを外して、そっと抱いて布団に寝かせた。電気を消して、おれも布団に横になった。健太は、闇の中で「ママ」と寝言を言った。あの光り輝くような少女が、今では蜘蛛男の店で働いている事実、時の流れの残酷さと自分の不甲斐なさを感じざるを得なかった。

あれから二人は、ススキノの高いビルの上上り、豊平川の花火を眺めていた。胸の高さのフェンスにもたれて、彼女は黙って見ていた。花火の音は、夜空の闇に反響して、温かく心地良い風の流れを、かすかに振動させているようであった。おれは彼女の横顔ばかり見ていた。赤い光の花が、緑色の瞳の中で燃え上がり、花弁を垂らすようにして、消滅しては、また咲いた。その不思議な映像を見ているうちに、涙が止まらなくなった。先程、病院で散っていた愛しく哀しい命に想いを馳せていた。

健太を抱き寄せた。上向きに寝て、目を見開き、闇の中に意識を集中させていると、漆黒の空間に遠い昔の花火が再び打ち上がっていた。鼻づまりを起こしている健太の寝息が、シューシューと耳元で聞こえていた。それは夜空に咲く寸前の花火の音を連想させた。小屋の外から、何台かの車の、けたたましいエンジン音が響いてきた。マフラーを改造しているのか、轟音は部屋の空気の闇を切り裂き、花火の映像を消した。健太が寝返りを打った。エンジン音が静まると同時に、大人になりきっていない女の嬌声がいくつも聞こえてきた。

——お化け屋敷だ

マジかよ、おい、と若い男の声も聞こえた。声の背後で、何人も
の男女の声がざわついていた。

——お化け屋敷に決まっているわよ。

——したらお前、入ってみれや。

闇の中に、再び花火が打ち上がった。おれは十六歳の少女に涙を
見られまいとして、腕で両目を拭った。飲みかけの缶ビールを口に
含んで、夜空に舞い上がった光の牡丹に向かって思い切り、ビール
を吹きかけた。ビールの飛沫は夜の闇に大きく散った。隣のビルの
電飾に照らされながら、白く薄れて消えていった。

彼女は、驚いておれの顔を見た。涙が再び溢れてきた。涙の理由
も尋ねずに、彼女は真っ直ぐにこちらを見ていた。表情を消してい
た。全てを見通しているような彫りの深い双眸に触れた時、おれは
もしかすると母の死を彼女に告げていたのではないかという錯覚に
囚われた。

彼女の顔が近づいて来た。

——誰か人が住んでるわよ。

——なしてこんな墓場の奥に人が住んでるのよ。

——この建物、きつと昔、何かあったと思うわ。

花火が上がった。

彼女の唇が、おれの唇に触れようとしていた。そうして躊躇する
ように顔を反らせた。思い切ったように顎を引いて、また唇を近づ
け、苦しそうにまた俯いた。

「ファーストキスなのよ。やっぱりお兄ちゃんに決めた」

それまでの動揺が嘘のように、彼女の唇は素早くおれの唇に触れ
た。そうしてくると後ろを向いて、両手で顔を覆った。

——幽霊がいるんだ。

――探検するか。

――だれが一番、根性なしか、これで判るわね。

怖い怖いという少女たちの艶めいた声が、少しずつおれの耳から遠ざかっていった。

花火の音が、夜空の真上から、落ちてきていた。おれにとっても初めてのキスの体験であった。男子高校から、男子学生ばかりの大学に入ってから以来、異性との交際の機会に恵まれていなかった。

おれは経験豊富な年上の男を装って、彼女を後ろから抱きしめた。高鳴る心臓の鼓動が、手のひらに伝わってきていた。自分の心臓もまた、悲鳴を上げて素早く動いているのが、彼女の温かい背中からこちらの胸に伝わってきた。おれは心臓の音を気取られまいとするかのように、彼女の乳房をティーシャツの上から、揉みしだいた。柔らかい乳房の中には、何かコリコリとしたしこりがあった。

「お兄ちゃん、…痛い」

「好きだ。結婚したいくらい大好きだ」

彼女は振り向いて、おれの背中に両手を回して、さっきよりずっと長く、唇にキスしてくれた。歓喜と悲嘆とが、胸の内で交互に入れ替わった。夜空に乱舞する光の花を背景にして、唇を寄せ合う二人のシルエットが闇の中に、いつまでも見えていた。

その映像は、広間の引き戸を無理に開けようとしている音で消えた。

――鍵がかかっているぞ。

――ガラス割ってみるか？

おれは布団から起き上がり、ハロゲンヒーターのコンセントを挿してからスイッチを入れて首振りボタンを押した。赤い光が、広間の闇の中を、移動しながら照らした。

うわあああッという幾人もの悲鳴が外から聞こえて来た。

――火の玉だ。

——家の中飛んでるぞオ。

ばたばたと、逃げ惑う雪道を踏む足音が遠ざかり、たてつづけに車のドアの閉まる音がした。エンジン音を轟かせながら、改造車の群れは墓場から去って行った。ハロゲンヒーターの電源を抜いて、布団の中に戻って眠りについた。

奇妙な夢を見ていた。巨大な円形劇場の観客席の通路に一人、佇んでいた。見渡すと、札幌ドームの何倍もの容積の空間であった。劇場全体は薄暗く、中央の舞台にのみ、スポットライトが当てられていた。観客席を見渡すと、何万人か何十万人か知れないほどの観衆が、ドームの中に満ちていた。満員の状態の観客席の遥か彼方は、もう人影すら見えないほど、距離がありすぎて霞んでいるだけであった。

おれは中央の丸く小さな舞台のスポットライトに目を凝らした。

なにやら人が立っているようであったが、遠すぎて、何を演じているのか、判らなかった。大観衆は、ざわめくでもなく、歓声を上げるでもなく、拍手するでもなく、ただスポットライトの中の人物を暗がりの中から見ているようだった。

気がつくと、大観衆が一瞬にして消えて、ドームの観客席には誰もいなくなっていた。静けさが漂った。そうしてまた、ぱっと、あらわれて、何事も無かったように、観劇をつづけていた。おれは何の感慨も無く、ただ、瞬く間に消えたり、現れたりする大群衆を見ている。おれは通路を中心の舞台へと、歩いて、下り始めた。何が演じられているのか、確認したかった。通路を歩いて行くにつれて、舞台の上の様子が鮮明になっていく。円形の舞台の上で、大雪の中を、背中を丸めて、誰かが歩いていた。さらに近づいて目を凝らした。猛吹雪の中をドカジャン姿で、冷気に顔をゆがめ、体を折り曲げるようにして歩いている、おれ自身の姿であった。そこで夢から覚めた。

夜が明けかけていた。大広間の道具類の間にぼんやりとした光が灑んでいた。広間からは菓缶の湯が沸いている音が、かすかに聞こ

えてきていた。布団から半身を起こした。卓袱台を無造作に引き寄せ、虚無僧から、もらった「病者の祈り」の皺の寄った真っ青な紙に見入った。「病者の祈り」を、繰り返し繰り返し、読んだ。虚無僧、翻訳の詩を、夜が明けきるまで眺めていた。

「本当の自分自身って、なんだ？」

同じ言葉を繰り返していた。

健太を揺り起こして、カップラーメンに納豆と生卵を入れて、昨夜と同じ朝飯を食べ始めた。財布の中身を確認した。今日、カローラにガソリンを入れて、現場で健太にパンでも食わしたら、数百円しか残らない金額だった。あと数日で給料日だった。それまで、この数百円で、なんとか凌がねばならなかった。給料が入ったところで、サラ金への支払いを済ませたら、ほとんど無くなってしまう。

「健太、服着ろ。今日の現場は、早いんだぞオ」

「ママ？」

「夜、会える。きっと会える」

おれはドカジャンを羽織った。健太のヤッケのチャックを上げた。小屋を出て、カローラのエンジンをかけた。気がついて、小屋に戻り、台所の流しにバケツを置いて、薄く水を張った。葉缶のお湯をバケツに注ぎ込んで、頃合いの温度にした。手を伸ばし、天井の物干しの針金から日本手ぬぐいを取って、バケツの湯に浸して、ぎゅうっと固く絞った。

日本手ぬぐいで健太の顔を拭いて、歯も、ぎゅっ、ぎゅっ、と磨いた。おれも同じように、顔を拭いて、歯茎や歯の裏まで布ごしに中指を器用に使って、磨いた。もう二人とも、しばらく風呂に入っていないかった。

カローラの助手席の子供用の椅子に、健太を坐らせた。車は平和霊園を抜けて、福井から盤溪の山の中に入った。目的地は昨日からオープンした真駒内の玩具屋であった。アイスアリーナを左手に、車を走らせた。ほどなく、現場に着いた。三階建ての建物の駐車場に車を停めた。

「すぐ戻る」

と健太に言って、滑り止めのついた軍手を履いて、車から降りた。備え付けのタラップで屋上まで上り、網を掛けて青い正方形のテントの上に据え置かれてある、赤と青のアドバルーンの様々なロープを手慣れた仕草でほどいていった。

アドバルーン全体に掛かっている固定するための止め網は、四隅をそれぞれ、屋上の床に張り巡らせてある土台のタイガーロープに固定させている。網の四隅のうちの二カ所だけほどいてやると、直径二メートルほどあるアドバルーンは、自らの浮力で、くるくると回転しながら、止め網をはだけた。アドバルーンの根元をタイガーロープからほどき、ロープに看板を取り付けて、するすると空に上げると、出来上がりである。

おれはこの仕事を、大学一年から卒業するまでつづけた。単純なようだが、奥の深い仕事だった。消防条例でアドバルーンには、必ず見張りがついていなければならない決まりになっていた。

作業を終えると、カロウラに戻り、車の中から空を見上げた。赤玉と青玉が、高く綺麗に空に上がっていた。赤玉には、にっこり笑っている女の子の顔が、バルーンいっぱい描かれていた。青玉には、表情のない男の子の顔が、同じように描かれていた。二本のバルーンにはそれぞれ、「オープン おもちゃ館」と縦に看板が付いていた。

「なんで男の子の顔も、にっこりさせなかったのだろう」

親方らしくない仕事ぶりを訝しく思い、おれは平和の小屋で、親方に訊いた。親方は背中をこちらに向けて作業しながら、肩だけでくっくつと笑って、

「健太をモデルにしたからだ。笑わせるの、忘れちゃった」

「……………」

「母親の恋しい年頃なのだから、早く捜してやらないとな」

健太の顔をモデルにしたという男の子の顔の絵は、無表情なところ以外、決して健太に似ていなかった。小学校低学年の年頃に見える

た。顔つきは無表情というより、極めて虚ろで、

「僕はどうして、ここで浮いているのだろうか？」

そんな戸惑いの表情であった。困っているわけでは無いのだけれど、ここにいる意味も解らない……。焦点の若干ぶれた両眼からは、そんな気持ちも見えて取れた。感情が無い。突風に打たれても雪に吹かれても、何のことか解からない。おれは青玉の男の子に、言い知れない滑稽さと哀しみを感じた。そうして、自分もまた、感情を鈍摩させ、無表情な生き方をしてきた人間に違いないと思った。泣いても笑っても、怒ってみても、それらは所詮、ふりをしているだけで、その場その場に応じて、喜怒哀楽の仮面を使い分けてきただけの四十年間だったのではないか。そうして、妻もまた、赤玉のアドバルーンに描かれた女の子のように、はっきりと自分の役割を認識しているように見せながら、その実、誰に対しても最適な自分を演じてきただけの、空虚な半生だったのではなかったろうか。アドバルーンと同じように、中身は空っぽで、風に流されてきただけの人間であったような気がしてならなかった。

昔、そんな二人は恋に落ちた。

昭和六十年の五月、おれは大学三年生だった。

おれの通っていた大学と同じ敷地内には、普通科の男子高校と、商業科の男子高校があった。大学も含め、どれも同じ学法人が経営する学園であった。普通科の男子高校は、北海道の私学では最も歴史が古く、多くの著名人を排出してきたらしかった。そんな著名人の一人の彫刻家の作品が、母校の創立百周年にあわせ、生徒通入口の横に設置されるという噂を聞いて、物見遊山で当時のおれは、大学のキャンパスを抜け出して、除幕式を見物に行った。晴天だった。

高校の正面の広場には学ラン姿の男子生徒ばかりが、千人以上、整列していた。プラスチックのファンファーレに続いて、数人の手によって除幕が行われた。見事なブロンズ像が現れた。青年の裸体像であった。校長の挨拶などから、それは「わだつみ像」と呼ばれ

る作品であることが解った。

「男の人ばかり」

振り向くと、中学生らしい女の子が、制服姿で、横にいる七十過ぎの無骨な老人に話しかけていた。

「怖いよ、爺ちゃん」

「お前が来年入るのはこの高校じゃねえ。隣の商業高校だア」

「来年から、共学になるのでしょ」

「共学の一期生になるんだア」

「女の子、たくさん入学するわよね。女の子、私だけならどうしよう」

「そんなら、モテモテじゃねえか」

おれは思わず笑ってしまつて、「大丈夫ですよ」と話しかけていた。「商業は愛校心の強い卒業生が多いですから、卒業生の娘さん達だけでも、相当、願書を出すらしいですよ」

「本当ですかア？ 良かったア」

彼女は胸に手を当てて、溜め息をついた。彼女の瞳は不思議な色をしていた。深い青色で、よくよくみると緑色にも見えた。海藻の透けてみえる、海の色を連想させた。日本人にしては、彫りの深い顔だちで、髪の色は深い茶色だった。

「どちらからいらしたのですか」

とおれは小柄な老人に訊いた。

「天売島さア。俺はそこでタコ漁やつとる。タコ、いいよオ」

「ホテルでしょう。天売島で一番大きなホテル。『ホテル第一』よろしく願いまアす」

と彼女は、にっこり笑つてお辞儀をした。

「旅館はカカアに任してるんだ」

校長の話が続いていた。わだつみ像は学徒出陣で戦死した青年達の慰霊の為に造られた像である旨の説明があった。そうして、

「死んでいった若者達の本来あるべき姿を表現しております」と言つて、演壇を降りた。

それにしても本当に逞しくも綺麗なブロンズ像であった。拳を肩の高さまで振り上げていた。短い髪にはウェーブが、かかっている。聡明で男らしい顔つきと筋肉の程よく付いた首、肩、胸……。そうして、よく締まったウエストと腹筋。背中から腰、臀部、太ももにかけて、綺麗なエス字を描いており、高い位置から伸びている足は、爪先に向って、緊張感を孕んだ柔軟で美しい流れを描いていた。応援団の奇声と不気味な踊りにつづいて、全校生徒が校歌を歌い始めた。千人以上の詰襟の学生服姿が、一定のテンポで右腕をまっすぐに、斜め頭上に振り上げて、それを振り下ろし、また振り上げて……。一種、異様な光景であった。

「やっぱり怖いよ。なんか普通と違うよ、この学校」

「だから、お前に入るのは、隣の商業だってば」

「商業も、良い高校ですよ」

思わず微笑みかけてしまった。除幕式が終わって、生徒達は校舎の中に引き上げて行行った。おれも大学の校舎に戻ろうとして、歩き始めた。後ろから肩を叩かれた。振り返ると、さっきの老人と女の子が立っていた。

「学生食堂に案内してくれんべか。飯、奢るよ」

と老人が言った。

「もちろん」

なぜかおれはこの老人と、頼りなげにキョロキョロと周囲の様子を窺っている女の子が気に入って、学食に着くまで学園全体を案内して廻った。大学の校舎に入ると、女の子は辺りを見渡して、

「いやだ、大学生まで男ばかり」

と嘆息を漏らした。学食では、名物のザンギ定食を勧めた。

「これが一番、安くて美味いんです」

二人は喜んで食べてくれた。

「ここの学食は、学園の高校生ならば、割引があるんですよ」

「当然だわね」

老人が頷いた。おれは女の子に年齢を尋ねた。

「十四歳です。でも、もうすぐ十五歳」

「お兄さんは？」

「二十一歳になったばかりだよ」

「俺は七十五歳だア。もうすぐ七十六歳」

「爺ちゃんに、訊いてないってば」

「どうして、お孫さんをこの学園の商業に入れる気になったんですか」

老人は淡々と話し始めた。

「昔、復員して、天売で商売始めたんだが……。しくじって、借金まみれになった。島から逃げ出して、札幌を徘徊していたのさ。したら、狸小路で、ここの商業の先生が、台に乗って演説しとった。立派な先生だったね。人間の生きる道を話していた。クリスチャンだった。入れ墨とか半纏にまで、兄貴とか、先生とか呼ばれとった。俺は、落ち込んでいたから毎回、話を聴きに行ったよ。あの先生の勤めていた学校なら、間違いないと思った」

それに、と老人は味噌汁を飲み干してから、「これからの若いもんは、井の中の蛙じゃだめだ。一度くらいは本島に暮らしてみないと」

おれは本島という言葉にびっくりして、北海道もまた、大きな島に他ならない事実を、再確認させられた。

学園を出て、平岸街道でタクシーを拾った二人に、頭を下げて食事の礼を言った。女の子には、

「来年、待っているからね」

と言って、別れを告げた。走り始めた車の窓を開け、老人は身を乗り出すと、

「天売島に來いや。これからの季節なら、エビ、腹一杯くわせてやつからなア」

と呟れた声で叫んでいた。

それから夏がきて、秋と冬が通り過ぎていった。おれは将来の進路を決められないまま、大学にはろくに行かず、アドバルーンの見張

りのアルバイトばかりやりながら、四年生の春を迎えた。

四月、残雪の残る高校のグラウンドを横目に、昼飯を食う為、学園生協の建物に入った。ロビーでは、学食の入り口あたりに、紺のブレザーを着た女子高生が五、六人、不安気に佇んでいた。おれは女子高生の制服姿にギョツとした。周囲の男子学生にじろじろと観察されて、それらの視線に戸惑っているようでもあった。その女子高生の中に、背の高い少女を見つけて、声をかけた。

「ずいぶん、おがったなア」

「お兄さん」

少女はおれを忘れては、いないようであった。小走りに歩み寄って来て、笑顔を見せた。彼女は、たった一年間で、すっかり子供から美しい娘に変貌を遂げていた。

「爺ちゃんにタコと魚ばかり食べさせられたからね」

「何センチ？」

「百六十五センチ」といった後、「プラス三センチ」ペロリと舌を出して照れくさそうに俯いて、「それが去年の秋の身長で、また二センチ伸びちゃった」

と言って恥ずかしそうに、おれを見上げた。紺のブレザーに可愛いらしい赤いリボンのネクタイがよく似合っていた。グレーのチェックスカートから伸びている足が、細く長く、可憐であった。去年会った時より髪の毛の色が黒くなっていた。それをポニーテールにし、前髪を、濃く長い形のいい眉毛にかかる辺りまで垂らしていた。おれの視線に気づいて、髪に片手をあてがい、

「入学早々、髪の毛を茶色く染めているクラスメートの男子が体育の先生に呼び出されて、バリカンで丸坊主にされたの。私も坊主にされるかと不安になって、変な話だけど私は逆に茶色から黒に染めたのよ」

「髪、痛めるぞ」

それには答えず、彼女は振り向くと、仲間の女子高生を呼び寄せた。

「みんなで食券売り場にいったら、割引出来ないって言われたのよ。お兄さん嘘つきね」

「高校生は校内の購買で券を買わないと、安くならないんだよ」
おれは女子高生の集団を引き連れて、学食に入った。食券売り場のおばさんに組合員証を見せた。

「全部おれが食べるから」

と連れの集団に視線を向けた。おばさんは苦笑いして、注文を聞いて、一人一人に食券を渡してくれた。みんなで席について、食事を始めた。少女達の雰囲気と笑い声が、男子学生ばかりのホールの中で、そこだけ、異質な華やぎを形成していた。天売の少女は、みんなから「オンちゃん」と呼ばれていた。

地元出身の生徒たちに対抗して、天売島やオロロン島の自慢話ばかりするので、最初、「オロリン」と呼ばれていて、それがいつの間にか「オン」と省略され、「オンちゃん」になったということらしかった。オンちゃんは、ザンギ定食を食べていた。

「この名物なの」と知ったかぶりをして、「一番安くて美味しいの」と意味ありげに瞬きをしてみせた。「今日はみんなで、学食にデビューというわけさ」

「友達ができて、よかったな」

おれは食事を終えると、講義の準備があるからと言って、

「ごゆっくり」

と彼女たちに手を振って学食を後にした。講義を終えて、一号館の学生ロビーで掲示板をしばらく確認してから建物を出た。外は、小雨が降り始めていた。わだつみ像の前で、立ち尽くしている少女がいた。

「オンちゃん」

ブロンズ像を見上げている少女がゆっくりこちらを向いた。雨に濡れた前髪が色白の額にはりついていていた。

「人間の本来あるべき姿って、何なのかしら」

おれも去年の校長の言葉を思い出していた。「若者の本来あるべ

き姿」を「人間の本来あるべき姿」と置きかえて言っているのが印象的であった。

「その言葉、よく覚えていたな」

「爺ちゃん、戦争で死んだの」

「天売の爺ちゃんは、父方？ 母方？」

「血は繋がっていないわ。天売の爺ちゃんは、戦争で死んだ実の爺ちゃんの戦友よ。私、小学生の頃、天売島の爺ちゃんに引き取られたの」

「天売島の出身じゃないんだ」

「生まれは平取」

「バイトの移動で通ったこと、あったかな……。名所か何かある？」
すると彼女は、胸を張って、毅然とした口調で挑むように言った。

「二風谷があります」

「にぶたに？」

そんなことも知らないのかと呆れた表情に変わり、

「誇り高い土地です」

「ごめん、さっぱりわからん」

オンちゃんは拍子ぬけしたように肩を落として、雨の中、商業高校の方向へと、足早に駆けて行った。

大学には、アドバルーンのバイトが休みの日だけ、時々顔を出す生活がつづいた。夏になり、母を見舞いに行った後、おれは籍だけ置いている大学の剣道部の部室を訪れた。ポケットから封筒を出して、窓際のソファアに座っている四年生の集団に歩み寄り、部長に差し出した。

「退部届？」

部長は封筒を受け取り、中を確認すると、

「今まで無理を言ってすまなかった。試合の時だけ利用して」

と詫びて、深々と頭を下げた。

母の病状がいよいよ切迫しつつあり、また、アルバイトに明け暮れなければ学費すら捻出できない窮状を、部長はよく理解してくれ

ていた。

「お前にこれ以上、試合で無様な思いはさせたくなかったんだ」

「稽古、さぼってばかりだった。迷惑かけた。申し訳ない」

体育会のサークル棟を出ると、七月の太陽が西の空に傾き始めていた。建物が学園の広場に幾つか長い影をつくっていた。影の中で警備員が伸びをしていた。おれは、飯を食っていなかったことに気がついて、学食に向かった。途中、思い立って、商業高校の裏手の定食屋へと進路を変えた。「一平」は老夫婦が切り盛りする、古びた食堂であった。耐用年数をとくに過ぎている木造二階建てを、騙し騙し、使い込んでいる様子の店であった。

暖簾をくぐり、窓際のテーブルの席に坐った。客はおれ一人だった。窓の外から、ギターの弦を爪弾く音が聞こえてきた。網戸越しに見た。商業の寮の裏庭で、オンちゃんが、少し前まで高校で使われていたであろう木製の勉強机にすわり、倒れた椅子に組んだ足の片方のスニーカーを置いて、膝に載せたフォークギターを演奏しながら歌い始めていた。透き通った音色でありながら、腹式呼吸のよく出来ている、歌声であった。抑揚の少ない曲を、子守歌を歌うようにゆっくりゆっくりと囁くみたいに発声していた。

天地を包む雪の色

その寂寞の冬去りて

緑の大野見るごとく

暗より明けし北海の

空光明のおとずれよ

まるでそのまま、彼女自身が詩の中の風景におかれたような歌い方だった。彼女の目線は確かに、闇から明けたばかりの厳しい北の海を見渡していた。おれは網戸を開き、

「オンちゃん」

「お兄さん」

オンちゃんはギターを勉強机に立てかけるや、組んでいた足を跳ね上げて、こちらに飛んで来た。

「隣の男子校の体育館から、しょっちゅう聞こえてくるのよ。校歌らしいんだけど、もういい加減おぼえちゃった」

「野郎の声でしか聴いたことなかった。女の子が歌うと、ぜんぜん雰囲気が違う。実際より、かなりスローテンポだった。聴き惚れていたよ」

「去年、初めて聴いた時は、恐ろしさばかりだったけど、こんなにいい詞だとは思わなかった。信じられる？　この歌うたう時、私、本当に天売島の断崖に立っているのよ」

おれはカツ丼を喉に掻き込み、

「どうしてそんなに歌うまい？」

彼女は遠ざかりながら、声だけで、「爺ちゃんがね……」

足音に続き、自転車をこぐ音が聞こえた。オンちゃんは自転車に乗ったまま暖簾をぐぐり抜け、自転車の前輪を店の中まで侵入させて来た。

「天売の爺ちゃんがね、江差追分の名人なのよ。私も爺ちゃんから習っていたの」

たしなめる店主の言葉に頭を下げながら、自転車を後退させて、外に停車した。店の中に入ってくるなり、テーブルの向かいの席に坐って、

「私のランボルギーニで飛ばしてみない？」

「だんだん、男の子じみてきたなア。卒業する頃には、口髭たくわえてるんでないかい？」

老夫婦が店の奥で笑っていた。

どうしても自分がペダルを踏むというオンちゃんを遮って、おれはランボルギーニを疾駆させた。荷台にまたがるオンちゃんは、おれの肩を何度も叩いて、

「もっと飛ばしてよオ」

オンちゃんの大声が、風で切れ切れになって聞こえてきた。中島

公園の方角に、真っ赤なアドバルーンが上がっていた。

おれはアドバルーンを見るや、

「あれはうちのアドバルーンだよ」

「わかるの」

「上げ方でわかる」

「さすが職人」

中島公園では、何かのイベントが行われていた。看板をつけたワゴン車を先頭に、何十人かの若い男女が列を作って、笑顔で練り歩いていた。アドバルーンに近づいて行くと、案の定、広場にタイガーロープを張り巡らしたテントの上で、親方が胡坐をかいている後ろ姿が見えてきた。オンちゃんは赤玉を見上げて、アドバルーンの長さを調節し始めた親方に向かって、

「おじさん、風船と一緒に飛んでかないでよオ！」
と、叫んだ。

赤玉が風に吹かれて、ゆっくりと回転しながら、こちらを向いた。アドバルーンに笑顔の女の子の顔が現れていた。女の子は、上空を斜めに流されながらも、あくまで笑顔で、男の子の方向を見て楽しそうに微笑んでいた。

「風、出てきたな」

助手席では、健太が腹に両手をあてがっていた。小さな爪の先が黒く汚れていた。目線で、

「お腹すいた」

と合図していた。

駐車場は混雑していた。おれは車と車の間を縫って、タラップに手をかけた。青玉の上げロープを手繰り寄せて、アドバルーンの高度を半分ほどまで下げた。赤玉も青玉に合わせて高さを調整した。電線やアンテナ、隣のマンションの避雷針……。アドバルーンは風に吹かれて傾くと、様々な障害物に引っかかる危険があった。カローラに戻った。健太を連れて、近くのコンビニまで歩いて行

った。すれ違いに小学生の集団が駆けて行った。雪道を蹴る長靴の音が幾つも、きゅっ、きゅっと耳に残った。

食パンを一袋だけ買って、車に戻った。後部座席のシートに置いてあるカップラーメンや缶コーヒーのたくさん入っているダンボールから、ジョージアだけ、二本取り出した。健太は食パンに白く小さな歯をあてていた。ジョージアを渡した。

男の子と女の子のアドバルーンは、風の中を前のめりに空中を疾走していた。男の子は女の子に誘われるままに、意味もわからず走っているみたいであった。男の子の顎の下についている「オープン……」の赤い文字が、こちらから見ると裏返しであった。女の子は、男の子の、きょんとした態度に業を煮やして、くると、あちら側にそっぽを向いてしまった。女の子はただの赤いアドバルーンとなった。

三(前書き)

息子

三

「風、でてきたわね」

赤いアドバルーンのロープを引っ張りつづけるおれに、オンちゃんは弁当の箸をとめて、言った。西岡の分譲地であった。「分譲住宅販売中！」と看板の網に貼られた黒いシートの文字が読めた。その向こうは青空であった。文字の影が青いテントの上を左に右に走っていた。影の文字は裏返しであった。オンちゃんはテントに坐り、眩しそうに目を細めて作業を見ていた。

「ぎりぎりまで下ろして、宣伝効果ある？」

分譲されてしばらく経過した宅地には雑草が膝の高さまで生い茂っていた。鉄の杭を四つ地面に打ち込み、杭から杭へとタイガーロープを四角く張り巡らしていた。ロープの中の雑草を足で踏み潰して、一辺がニメートル強の正方形の青テントをアドバルーンの寝床として作ってあった。おれはオンちゃんの隣に足をかかえて坐り、「上げてないより、ましなんだ」

ススキノのビルの屋上で二人で花火を見た日以来、夏休みに入ってから、オンちゃんは毎日のようにランボルギーニを飛ばして、西岡のアドバルーンの現場に弁当を作って持って来てくれていた。

「こないだは、ありがとう」

オンちゃんが母の葬儀に出席してくれた礼を、言い忘れていたことに気づいて、おれは頭を下げた。

「香典までいただいて…」

「あれは爺ちゃんからよ」

母の葬儀は密葬に近い形で町内会の役員や、親しかった近所の住民など十人程で行われた。平和の町内会館を使用した。町内会や葬儀屋との打ち合わせや段取りは、全てアドバルーンの親方が取り仕切ってくれた。金のないおれの要望を聞いた親方が僧侶がわりになった。どこからコピーしてきたのか、用紙に印字された短いお経を

読んで、二言三言、申し訳なさそうにお悔やみを述べた。オンちゃん、制服姿で涙を流していた。

「私、親の記憶がないの」

すすけた畳に伏して泣いていた。黒く長い髪が、斜めに曲がりくねりながら、古い畳に這っていた。肩が震えていた。

「葬式を出せるお兄ちゃんは幸せなんだ」

と、励ますでも羨むでもない言葉に出席者は半ば呆れていた。

はげしい陽光を浴びながらテントの上で弁当箱の蓋を閉める彼女に、

「本当に親の記憶ないのか」

と尋ねてみた。

「うん、物心つく前に両親が死んでいたの。だから記憶が無いの。その後、近い親戚がいなくて、最初は同じ町の遠縁の親戚に引き取られたらしいんだけど」

「らしい？」

「学校のことも、友達のこと、自然の風景も、故郷のことは全部おぼえているわ。ただ、最初に引き取られた家の記憶がないの」

「……………」

彼女は邪魔くさそうに虫を手で払いながら、

「不思議でしょう？」

と無感動に、口尻だけで笑った。

「ただね、私には足長じいちゃんがいた」

「天売の爺ちゃんか」

「いつだったか、泣きながら天売にいる爺ちゃんに電話したことは覚えてる。次の日、爺ちゃんが来た。夜、林の中の道を、爺ちゃんについて行った。なぜか爺ちゃん、手に日本刀を持っていたの」

「日本刀だァ！」

「あいつ……あいつを追いかけていたの。飯場についたら、何人かがスコップで襲って来た。スコップの先が取れて柄だけになった……。そこに警察が来たのよ」

「どうなったんだ」

「事情が事情だったらしくて、爺ちゃん、執行猶予がついたみたい。間もなく、私は天売に引き取られた。小学校五年生の時のこと……」
彼女は他人事のように話していた。

「それからは楽しかった。学校に通いながら、ホテルの手伝いしたり、爺ちゃんの船に乗って、タコ漁をやってみたり……」

彼女はテントにうつ伏せになって、海底を覗く仕草をしながら、
「こうしてタコを探しながら、体を斜めに反らしてね」ブルーギーンズ姿の長い右足を、くいつ、くいつと器用に折りまげて、「こう、足で櫂を操作するの。そうして右手でもね……」

海底を覗きこみながら、右手を後ろに回して、もう一方の櫂を握る仕草をした。青いテントを海面にみたてて、片足と片手だけで磯船を操縦していた。看板の文字の影がタコを探している彼女の白い टीーシャツの背中を横切って行った。その機敏な体のくねらせ方があまりにも愉快で、おれは立ち上がり、腹をかかえて笑った。

「面白いでしょ」

と振り向いた横顔を見た時、彼女の上におれもうつ伏せになって重なった。耳元で、

「結婚してくれ」

と囁いた。オンちゃんは、おれを跳ね退け、体を横むきにして、

「本気？」

「嘘は言わない」

横たわったまま、彼女を抱き寄せた。

「爺ちゃんに挨拶に行くよ。今は、学生だから無理だけど、大学を卒業したら、君をお嫁さんにする」

「私でいいの？」

彼女の吐く息は炎天下の空気よりも熱かった。それを頬にうけて、全身に漲る血のたぎりを力ずくでいさめながら、

「来週、二人で天売に行こう。来週はアドバルーン、二日休める。オンちゃんも夏休みだし」

彼女は半身を起こして、

「いいよ」と言って、髪の毛を直した。あっけらかんとした口調で、「お兄ちゃんとなら結婚したい。それに……」鼻筋に皺を寄せていたずらっぽく笑った。「結婚してしたことないから、前からしてみたかったの」

両手を広げておれに覆い被さってきた。生まれて初めて女性の口と舌を吸った。車が通り過ぎて行った。雑草は二人の姿を隠してくれている。

「はやく街に馴染めるように、夏休みは帰って来なくていいって言われていたのに……」

「爺ちゃん、びっくりするかなア」

「お兄ちゃんなら大丈夫。爺ちゃんに気に入られているみたいだからね」

翌週、同じ現場で、アドバルーンの仕事の終わる時刻、ランボルギーニに乗ったオンちゃんが姿を現した。いつもの白いティーシャツとブルージーンズだった。背中にリュックを背負っていた。

「ユーラシア？」

彼女はおれの自転車を見て、尋ねた。

「ブリヂストンのアトランティス……ユーラシアの兄貴分だよ。中古だけどね」

「ランボルと似てるね」

「名前つけてくれ。カウntaxでもポルシェでも、何でもいいから、好きなようにつけてくれ」

「じゃあ……オンボロギーニ」

「オンボロギーニだア」

オンちゃんはおれの言葉を無視して、

「昨日、お風呂場で鏡を見たら、お尻が赤くなっていたの。お兄ちゃんが荷台にばかり乗せるから……。オンボロギーニが来てくれて助かったア」

ジーンズの尻を突き出してここ、と手を当てた。そのあまりの形

の良さに目を逸らしてしまった。おれは無言で自分のリュックを背負って、オンボロギーニに飛び乗った。

「行くぞ」

札幌市を出て、望来にたどり着いた頃、左手に夜の海が見え始めていた。厚田の公園で遅い夕食の握り飯を食べた。

「休んだら、かえって苦しくなるから、適当に飛ばして行こう」

「……………」

それから二人は日本海の海岸線を夜通し走り続けた。羽幌のフェリーターミナルに到着した頃には朝になっていた。自転車を停めて、近くの草原で荒い息を吐きながら、大の字になって二人はしばらく休んだ。フェリーターミナルは小さな建物であった。二十人も坐れば満席になる数の椅子だけが並べてあり、切符売りの女性が、ガラスのあちら側で欠伸をしていた。室内には切符売りの他には、身なりの良いショートカットの女性が一人、椅子に坐っているだけだった。二十代後半に見えた。女性は、二人の尋常ではない雰囲気を感じたらしく、

「どこからいらしたの？」

と声をかけてきた。

「札幌です」

「札幌から、どうやっていらしたの？」

「夜通し二人で自転車をこいで来ました」

なあ、とオンちゃんに声をかけたら、おれの胸にしなだれかかって寝息をたてていた。

「可愛い子ね？ 年はいくつ？」

「十六です。同じ学園の後輩です」

「交際しているのね」

笑いかけたが、淋しそうに顔を逸らせて俯いた。おれは彼女の言葉づかいや、柔らかく上品な印象に親しみを覚えて、

「来年、結婚するんです」

彼女は少し驚いた様子で

「そうなの、おめでとう」

「お姉さんは、どこからいらしたんですか」

「川崎……。街全体が下町みたいな所よ」

オンちゃんをそっと椅子に横たえて、頭の下に枕代わりのリュックを置いた。切符を二枚買った。席に戻りながら、

「今回の旅行の目的は、やっぱり天売のオロロン鳥見物ですか」

「天売に来るのは四回目。知らなかった？ オロロン鳥はもうほとんどいないのよ。でも他の海鳥の数は全部で約百万羽」

「百万羽？ 政令指定都市の人口じゃないですか」

「百万羽が、歩いて一周しても、一時間足らずの小さな島に住んでいるのよ」

「本当に？」

それきり二人は黙り込んでいた。彼女がふいに、札幌、札幌……と呟き始め、

「札幌は、いい所なんでしょう？ 札幌で暮らしてみたいな」

「失礼ですが仕事は何をされているんですか」

「今は無職なの。前は東京の病院で働いていました」

「看護婦さんでしたか。看護婦さんなら、どこでも良い勤め先あるでしょう？」

「……………」

オンちゃんの寝息を聞いているうちに、耐え難い程の睡魔が訪れて来た。オンちゃんの枕を半分借りて、おれも椅子に上半身を下ろした。どれくらい時間が過ぎただろう。女性の声で目が覚めた。気がつくと、看護婦がおれを揺すっていた。

「フェリーの到着よ」

おれはオンちゃんの肩をつかんで軽く揺すった。

「島に着いたのね」

とねぼける彼女の背中を叩いて無理に起こした。

二人は自転車に肩を抱えて、小型のフェリーに乗り込んだ。甲板に二台の自転車を倒して寝かせた。二等の広間に辿り着いた。他に

二等の乗客は十人ほどいた。二人は床に横たわり、それぞれのリュックを枕にして、再び眠りについた。乗務員に起こされた時には広間に誰もいなくなっていた。おれたちは急いで、自転車を担いで島に上陸した。天売島のフェリーターミナルの前では、旅館やホテルのそれぞれに趣向を凝らした宣伝用看板を手にした人達が、観光客を勧誘していた。

「お姉さん」

勧誘されているさっきの看護婦に声をかけた。

「知り合い？」

オンちゃんは問答無用で看護婦の腕をつかむと、こちらに連れて来た。そうして停車している白い小型バスの運転手に手を振った。小型バスには塗料の剥げた文字で、「ホテル 第一」と黒く書かれていた。みんなでバスに乗り込んでから、オンちゃんは看護婦にお辞儀した。

「『ホテル 第一』の娘です。この度はご利用ありがとうございます」

初めて看護婦の表情に笑顔がわいた。

「オンちゃん、ススキノの客引きでも、こんな無茶な勧誘しないぞ」
「天売は人も生き物も生存競争の厳しい島なの。野生の生存競争は、後で見せてあげる」

看護婦にはその言葉の意味が解ったらしく、

「楽しみね」

運転手がバスに自転車を積んでいた。乗客はおれとオンちゃんと看護婦、そして二台の自転車だけだった。五分も走らないうちに、ホテル第一に到着した。ホテルは海を見渡せる高台に位置していた。建物は鉄筋コンクリート三階建てであり、確かに旅館というよりも小型のホテルと言えた。ロビーに入ると爺ちゃんがおれを見つけて、

「ご苦労」

とフロントから出て来た。

オンちゃんは一階の一室まで案内してくれた。

「シングルでは、うちで一番いい客室だからね。内装工事、終わったばかりの部屋」

都市部ではありふれたベッドとテレビが設置されている部屋であった。微かに塗料のにおいが漂っていた。窓を開けると一面の海だった。塗料のにおいは消えた。波の音と潮風が心地良かった。

「午後、迎えにくる」

オンちゃんが部屋から出て行った。おれは全裸になって、着ていたティーシャツで全身の汗を拭き、リュックから着替え用のティーシャツとブリーフを取り出して、身につけた。ベッドに仰向けとなり、目を閉じて波の音を聴いているうちに眠ったようであった。

「けもの臭いよ」

オンちゃんの甲高い声で目が覚めた。慌てた様子で床に脱ぎ捨てられたブリーフとティーシャツをビニール袋に入れていた。

「パンツもシャツもまだ濡れていたじゃないの」

「おれは獣か。汗臭いと言うのなら解る」

「お兄ちゃんは獣に近い人でしょう？ そんなことより早くジーパン、はいてよ。お昼ご飯の後は、ランボル対オンボロギーニで、天売のサーキットを競争しましょッ」

質素な造りの食堂だった。小規模な学生食堂を思わせた。大皿に魚介類の刺身が盛られていた。味噌汁は、信じられないほど芳醇な磯の香りを発していた。味噌汁を一口飲んで、

「なんだこれはア」

と声が出た。オンちゃんも嬉しそうに刺身を口に運んでいた。大皿に盛った殻つきの生ウニを指差して、

「天売のバフンウニやムラサキウニは日本一なのよ」

「形容しようのない味だ。こんなに美味しいもの食ったことない」

「海のダイヤって呼ばれているの」

おれは何度もご飯茶碗を空にした。ウニや刺身を食るように食べた。味噌汁を飲んだ。途中、出てきた焼き魚を頭まで食べた。

「ウニは爺ちゃんが今朝、獲ってきたのよ」

「タコ専門じゃないのか」

「いま時期はウニなの。タコと同じ要領で獲るのよ。こう、メガネを口にくわえて」

「メガネ？」

「解るでしょ。海底を覗くためのガラスのついた大きな筒。ここいらではみんなメガネって呼んでる」

早くレースをしようとオンちゃんに急かされて、おれは食休みもろくに取らずにオンボロギーニのペダルに足をかけた。オンちゃんはずでに発車していた。

「待てよ、おい」

「ついといで。サーキットに案内するから」

オンちゃんの言うサーキットとは、島を一周り出来る車一台通るのがやつの狭い道路であった。そこを、二人で競争した。最初の一本はオンちゃんに取られた。あまりにも広大な海と空に見とれていた。断崖の形状やスケールに圧倒され、空から海へと落ちて来て、海底に突き刺さったような刃物を思わせる巨大な岩の高さにも驚いていた。

「お兄ちゃんらしくないわねエ。次はこの看板がスタートでゴールだからね。三本勝負。あと二本！」

激しくせめぎ合いながら、林を抜け、坂道を曲がりくねりながら走った。住宅地や漁港付近では、住民や漁師姿が大らかな様子で、二人のつばぜり合いを楽しそうに見物していた。再び眼前に巨大な岩の刃物があらわれた。

「赤岩っていうのよッ」

彼女が追い越していきながら、スピードを緩めたオンボロギーニの前輪を思いきり蹴った。転倒して路外の草原に投げ出されてしまった。

「汚すぎるぞオ」

「札幌での恨みは天壳で晴らすのさア」

あははっと笑ってさっきの看板めがけて背中を丸める彼女の後を

追った。今度は道を覚えていたので、ゴール寸前で彼女を抜いた。看板には「カブト岩」と赤いペンキで書かれていた。

「二本目はおれが取ったぞ」

「今のはまぐれよ。最後は逆回りで行くわよ」

今度はさすがに本気にならざるを得なかった。断崖の切り立つ岩肌にもカモメの大群にも、赤岩にも目をくれなかった。漁港を過ぎたあたりから、オンちゃんとの距離が開き、そのうち彼女が見えなくなった。

「勝った」

と呟き、駄目押しをかけるようにペダルを強く蹴った。右手の視野の片隅に浜辺を感じていた。天売港沿いを矢になって進み、再び断崖が見え始めた時、遙か前方の野原から、オンちゃんが道路に飛び出して来たのが見えた。彼女は縦長のこの島を横切って渡って、サーキットに戻ったのだった。

「汚いのにも限度があるぞオ」

腰をサドルから浮かせて、前のめりになってランボルを揺らす彼女の後ろに追いついて行き、

「もう少し」

と唸った時、大きなカモメが一羽、オンボロギーニのすぐ前を通り過ぎようとして、びっくりしたみたいに空中で羽をばたつかせた。驚いたのはこちらも一緒だった。カモメに激突されるか襲われるのかと思った。ブレーキをかけた。カモメは低空を旋回した後、断崖の斜面を海面へと滑空して群れの中に消えた。

気を取り直して彼女を追いかけた。ゴール間近かで、なんとか追いつきそうになった時、オンちゃんはランボルギーニのブレーキを絞って斜めに傾きながら後輪を滑らせた。土煙が舞った。真横になって道をふさいでいた。危うく彼女に衝突しそうになって、急停車した。おれに向かって、ペダルを一気に蹴って前輪を空中に高く跳ね上げて威嚇した。回転する前輪から土が飛んできた。

「うわッ」

驚愕して、オンボロギーニごと横倒しになってしまった。

「この野郎」

ようやく追いついてランボルギーニの荷台を指で捕まえた時、カブト岩の看板を通りぎていた。

「正義は勝つ」

オンちゃんは、ランボルに乗ったまま、断崖の斜面のカモメの群れを観衆に見立てて、ありがとう、ありがとう、と手を振っていた。

「そんな正義があるかァ！」

ブレーキをかけて荷台を引っ張って停止させた。彼女を捕まえようと飛びかかった。彼女は自転車を倒したまま、野原の方角に逃げ出した。おれは何度も、奇妙な穴に足を引っ掛けて転んでしまった。「こっちにおいでエ」

オンちゃんに挑発されて全速力で走った。また、穴に足を取られて転んだ。立ち上がり、数メートルも走らないうちに性懲りもなく倒れてしまった。同じことを幾度か繰り返しているうちに、疲れ果て、

「やめたやめたァ！」

と仰向けになって空を見た。すると、なんという空だろう。空の青には一点の混じりっ気もなく、ただただ青かった。その下を、何百、いや、何千ものカモメが、遠く近く、空に舞っていた。こんなにも多くのカモメが上空を飛んでいたことに、おれはレースに夢中で気がついていなかった。オンちゃんが近づいて来た。

「完敗ね、お兄ちゃん。学園の山猿も天壳の自然には勝てなかった」

「負けた」

「解ればよろしい」

「偉そうに言うな」

おれは彼女に抱きついて押し倒した。

「あの穴はなんの仕掛けだァ？」

彼女は仰向けの姿勢でおれに両肩を抑えつけられたまま、顎だけで後方の空を示した。振り向くと西の方向に巨大な雲が青空の下、

浮かんでいた。地球上には絶対に存在しない、あまりにも大きな滝であった。水面部分の雲はどこまでも白く水平であり、そこから大量の水が海に流れ落ちて、白い水しぶきを無限に飛散させているように見えた。

「滝だ」

「どう見ても滝ね」

二人とも草原に胡坐をかいて、不思議な滝を黙って見つめていた。流れ落ちる巨大な水しぶきの中から、数千のカモメが現れては消え、同時に数千が吸い込まれていった。水しぶきは、この瞬間にも、刻々と海に落下しつづけていた。

野原にチューリップに似た黄色い花が咲いていた。おれは花を一輪、摘んだ。雲の滝を眺めているオンちゃんの前髪に挿した。オンちゃんはこちらを向いてうつ伏せになり、野原に肘を立て、物憂げに頬杖をついた。頭に黄色い花をさしている癖に、眉間に皺を寄せて憂鬱そうに思い悩んでいる顔がアンバランスでおかしく、可愛らしかった。

「爺ちゃん、何て言うかしら」

「結婚のこと？」

「手紙には書いて送ってあるんだけど……」

彼女は頭から花を抜いて、

「エゾカンゾウ……」

「女性に花をあげたのは二歳か三歳の頃、母親に庭に咲いているタンポポを摘んでプレゼントして以来だ」

「私も親にタンポポをあげたのかしら……」

「子供は親に花をあげるものだよ。それが子供なりの精一杯の感謝の表現なんだ。子供はそれが嬉しいんだ」

「お兄ちゃんは幸せね。妬ましい」

彼女の頬杖をつく顔と、おれの胡坐の膝の間の地面の穴に手を入れた。

「気になるんだけど、この島、穴だらけだなァ。まるで蜂の巣だ」

「それはウトウの巣。穴の数はおよそ三十万個」

「ウトウって、鳥か」

「明け方、猟に出て夕暮れ時、コウナゴを長い嘴に沢山くわえて巣に戻る。家で、奥さんと子供が待っている。人間より勤勉なのさ」

「この中に奥さんと子供がいるのか」

「腕を入れてごらん」

おれもうつ伏せになって、斜めに傾斜している穴に腕を入れてみた。肩まで差し込んでも指先には何も触れていなかった。オンちゃんは乾燥した細長い植物の茎を野原から拾ってきて、

「これで突いてごらん。優しくね」

茎を持って改めて肩まで腕を穴に入れた。柔らかい羽毛の感触と茎を押し返してくる微妙な感覚が指先に伝わった。

「いる」

それからオンちゃんは上空を飛び回る数千のカモメの爆発的な舞いを指差した。

「カモメは自分では猟ができないから、夕方、帰宅途中のウトウのお父さんから、コウナゴを奪うの。ウトウも餌を奪われまいと必死で逃げる」

「カモメって悪いやつだったんだなア」

「それがカモメの仕事なの。ちゃんと仕事して、卵や雛を育てているの。カモメって表情ないように思うでしょ？ 雛を見ている時のカモメって、からだ全体で喜んでいるよ」

「ウトウもカモメも親なんだな」

「お兄ちゃん、私、親になる自信がないよ」

「……………」

おれは自転車に乗った。彼女を手招きした。

「最後の決戦だ。ゴールはホテル」

「お兄ちゃんずるい！」

息せききって、ランボルギーニが後ろから追いかけてきた。オンちゃんからは、さっきまでの闘志が消え失せていた。

太陽が傾いて、海面は暮色に染まり始めていた。ホテルに戻って窓外の海を眺めた。一羽のカモメが逆風にのって、海面すれすれを羽ばたきもせず、ふわっと浮かぶように飛んでいた。空中で羽を広げ、ゆらゆらと静止しているようにも見えた。おんちゃんが部屋に入って来た。

「オンボロギーニの出番よ。早く外に出て来て」

二人の自転車は狭い道を、ゆるゆると走っているホテルのバスを軽く抜いた。赤岩が見える崖までたどり着いた。長い階段を下りていくと、展望台が、崖から突き出るように設置されていた。その周辺には既に何十人かの観光客が集まっていた。風が強く、滝の形の雲は、既に形を崩していた。展望台に下りて行こうとするおれを制して、

「通はここから眺めるの」

二人は展望台から少し離れた断崖の草の上に自転車を停めた。崖の急斜面で待機しているカモメの集団や群舞を始めているカモメがざわめき、声を張りあげていた。西の空から、鳩ほどの大きさの腹の部分だけ白い鳥が、次々と飛んで来て、着地するや、羽をばたつかせ素早く走って巣穴に戻って行った。体は黒っぽく、薄紅色とも黄色ともつかない嘴の色であった。その嘴の付け根まで、口いっぱいに銀色に光るコウナゴの束をくわえていた。

「ウトウか。もの凄い数だ」

「序の口よ」

太陽が海に沈み終わる頃には、うすら赤く染まった暮色の中からウトウの群れが現れて、空一面を覆いつくした。おれはイナゴの大群に襲われる錯覚を覚えた。体に比して小ぶりの羽を、見えないほど速く、上に下に動かしていた。着地してはカモメに追われ、コウナゴを奪われていた。首尾よく食事をくわえたまま、巣穴に消えるウトウもいた。落下してくるウトウの羽音が空気を裂いて、いたる所に落ちてきていた。攻防を繰り返すカモメとウトウの奇声、無限の羽音、草の中でのぶつかり合い……。上空ではいまだに何万、何

十万羽のウトウに島全体が覆い尽くされていた。ウトウは島に落下を続けていた。数万の鞭が、同時に風を切って激しく回転しているような音音音。おれは驚嘆のあまり蹲ってしまった。

「だいじょうぶ」

オンちゃんに肩を叩かれ、展望台へと二人で歩き始めた。赤岩が輪郭だけになって、夕闇の中にぼんやりと聳えていた。海の中に巨人が佇んでいる様に見えた。階段で見ている人々も、展望台の人々も、誰もが呆気にとられて無口になっていた。階段を上がって来た看護婦に、

「どうも」

と頭を下げた。返事は無かった。三人は並んで鳥を見ていた。階段の下草原でも、草をかき分け、ジグザグに曲がりくねりながらウトウとカモメが羽と足で走っていた。ついに餌を取り上げたカモメに向かつて、看護婦が、

「人のものとするなんて、ひどい女！」

と吐き捨てるように言った。

おんな？ おれはびっくりして看護婦の横顔を見た。看護婦は我を忘れたように、カモメとウトウの戦いを、顎を引いて目を見開き、食い入るように凝視していた。オンちゃんを連れて自転車に戻り、オンボロギーニにまたがった。

「キャパシティーを超えたものを見ると、人間は思考が停止するか」

「最初はみんなそうよ。私、小学校の時、初めてこの光景をみて大声で泣いたわ。それまで一度も泣いた記憶は無かったのに。きっと何かを思い出したのね」

「あの看護婦さんは、四回目だと言っていたが」

「何かあったんでしょ？ 女性のことは詮索するものじゃないわ」

数百羽のウトウとカモメが二人を避けて、野原の方向へと消えていった。耳元すれすれに過ぎて行ったウトウの爆音のような羽音に仰天して、サドルを跨いだまま自転車を傾けて、片膝をついた。平

然としているオンちゃんに、

「よく平気だなア」

「二回目からは、そう驚かなくなる」

「この島に、ウトウだけで何羽いるんだ？」

「ざっと六十万羽。雛を入れると、それ以上」

「……………」

二人はホテルに向かって夜の坂道をペダルもこがずに無言で下った。ウトウの数が急速に減って、街の灯りが見えてきた。自転車を停めてホテルのロビーに戻った。爺ちゃんがソファに坐り、新聞を読んでいた。ロビーにはいたる所にカラスに似た鳥の剥製が飾られていた。カラスよりも野性味に欠けた優しい外貌であった。カラスと違い、胸と腹だけ白い羽毛であった。立ち姿がペンギンにも似ていた。

「触ってもいいよ」

爺ちゃんが新聞越しに言った。

「全部おなじ鳥にみえますが、カラスですか」

「ウミガラス。……オロロン鳥だア」

「オロロン鳥とは、遇えないと思っていました。まさかこんな形で……………」

「剥製ならば、島中にいっぱい、いるよオ。持ってくかア。」

「……………」

「二人でこっちに来い」

爺ちゃんに手招きされて、オンちゃんと一階の廊下を歩いていった。突き当たりにカーテンが掛けられており、その向こうが、住居になっているようだった。十畳ほどの小綺麗な和室に案内された。畳から、張り替えて間もない匂いがした。テーブルには、魚貝類中心の豪華な食事が用意されていた。

爺ちゃんは二人に坐るように促した。

それからオンちゃんの最初に引き取られた家でのこと、それ故に日本刀事件があったことなどを説明された。

「それでもいいのか」

と爺ちゃんに訊かれ、

「全て、引き受けます」

とおれは応えた。オンちゃんは泣いていた。

そうして、畳に置いてあった木箱の中から、不思議な形の青い器を三つ取りだしてテーブルに置いた。よく見ると彫刻が施された木製の小さな台座に、半分に切断された鶏の卵ほどの大きさの殻が据え付けられていた。殻は外側が鮮やかなコバルトブルーで、内側には漆が塗られていた。

「オロロン鳥の卵を加工したものだア。家宝にしている」

三つの器に少量ずつ清酒を注ぎ、おれとオンちゃんに手渡した。

「何もかも我流で申し訳ない。婚約の杯だ。これで決めよう」

うながされるままに酒を飲み干した。オンちゃんも眉根に皺を寄せながら喉に流し込んでいた

「仮祝言はあんたの母親の喪が開けてから。入籍はこいつが高校を卒業するまで待てるか」

「待ちます」

それから和室には、笑い声が溢れた。爺ちゃんは酒で目の周囲を赤らめていた。興にのって、

「追分なんぞを、ひとつ」

胡坐をかいたまま、江差追分を歌い始めた。瞼を閉じて、船に揺られるように上体をゆっくりと前後させていた。そうして半眼となり声を絞った。誰かに耳打ちするように小声で、身体の力を抜いて、ゆったりと歌っていた。それはいつかのオンちゃんの歌い方にも似ていた。

部屋に戻って灯りを消した。ベッドに寝ていても、爺ちゃんの追分は、耳の奥に微かに残り、いつまでも響いていた。瞼の内側の深いところでカモメが飛んでいた。薄れゆく意識の中、そこだけ鮮明な一角に夕暮れの空の色とカモメの飛翔を見ていた。

「お兄ちゃん」

目覚めて起き上がった。網戸を開けてオンちゃんが片手にスニーカーをぶら下げて、窓から入って来た。

「わかったでしょう？ 初めてじゃないのよ。平取でね、酔っぱらいの義理の父親に、何度も……。それでもいい？」

素早くジーンズと टीーシャツ を脱ぎ捨てて、全裸になった。彼女の肢体は、窓から漏れる月明かりに照らされた美しい輪郭だけの黒い影であった。そして影がベッドに忍び込んで来た。覆い被さってきた、彼女の汗ばんだ背中から盛り上がった尻にかけての曲線を月明かりが、うっすらと浮かびあがらせていた。白い肌が艶めいていた。それから二人は波の音と一つになった。おれが果てようとした時、彼女はふいに、激しい息づかいで、

「首を絞めて」

と言った。

訝りつつも、彼女の首に両手を掛けた。

「もっと強く。お願い……。殺すつもりで」

汗ばんだ首筋に両手をぬめらせながら、おれは達した。彼女の抑えた喘ぎ声が瞬間、大きく波立った。オンちゃんは両手を顔に当てて、

「やっぱり見えた」

「何が？」

「自分が……犯されている映像が、一瞬、ぱっと見えた。私が天売に来て間もない頃、上級生の男の子と喧嘩して、馬乗りになって首を思いっきり絞められた。殺されるかと思った。その時も見えただ、今はその時より、はっきり見えた」

「首を絞められたら苦しいだろう？」

「苦しいし、痛い。頭の中が真っ白になって、閃光が走る。その時、光と一緒に映像が見えるのよ」

「辛いだけだろう」

「苦しいんだけど、妙に気持ちがいい。解き放たれる感じ。不思議ね。不謹慎だけどお兄ちゃんになら何でも言えちゃう」

「その感覚、おれも、少し解るよ」

シートまでびしょ濡れであった。服を着て、二人で窓から飛び降りて外気に触れた。

前浜まで走ろうと急かすオンちゃんに手を引かれた。音を立てないように自転車で乗って出発した。月明かりの下、自転車を飛ばした。前浜は小さな浜辺であった。右手の沖合に遠く、幾つもの集魚燈の灯りが小さくほのめいていた。

二人は当然のように着衣を砂浜に脱ぎ捨てた。全裸で海へと駆けた。オンちゃんの後ろ姿の美しさと全身に漲る躍動感におれは息をのんで少しの間、立ち止まってしまった。火照った身体に真夏の海水は心地良かった。沖合までクロールで競争した。遅れてついて来たオンちゃんが立ち泳ぎしながら、

「悔しい！ 山猿に負けた」

「石狩の大浜に通っていたんだよ。夜の海は特に好きだ」

立ち泳ぎの姿勢のまま口づけをして身体の動きを止めた。二人の身体は海底へと沈んでいった。闇の中で抱き合い互いに足を絡めた。二人は上に下に回転しながら沈みつづけた。平らな岩礁に彼女を横たえた。彼女はおれの両手をつかんで自分の首に運んだ。意図を察して足で海水を蹴りながら、首を絞めつけた。それは彼女がおれの両腕に手を掛けるまでつづいた。海面に顔を出した彼女は、涙声で、「ありがとう」と言うなり、砂浜へと戻って行った。おれもゆっくりと後を追った。

砂浜に上がると、オンちゃんは既にジーンズを履いていた。背中腕をまわして、白いブラジャーのホックを繋げながら、振り向いた。ティーシャツを着て、砂浜に腰をおろすと、何も身に着けていない、おれをつくづくと眺めて、

「お兄ちゃん、わだつみ像にそっくり。今頃気づいた」

「山猿って言ったろ？」

「男ばかりの中にいたから気づかなかったのね。それに……」
「なんだ」

「お兄ちゃんって、もしかして私が初めてだったの？」

「そんなにぎこちなかったか」

「すごく嬉しい。さっき、海の中で首を絞めてくれたことも……。部屋では一つしか見えなかった光と映像が、細切れに幾つも見えたんだよ」

おれは照れ隠しするように、再び海に向かった。

「一時間くらいで戻る」

「そんなに？」

「自分の中に潜るんだよ。色々あったのは君だけじゃない」

潜ってみると、石狩の海も天売の海も、夜の海に変わりはない。天売港を防波堤沿いに泳ぎ、沖に出てカブト岩を遠く月下に望んだ。海底を目指し、足で激しく水を蹴った。思いのほか深い海だった。海底にはたどり着けなかった。海面に戻り、また深く、潜った。もう完全な暗黒であり、方向感覚もなくなっていた。手足の動きを止めて、海中、闇の中に浮かんだ。

カブト岩を通り過ぎ、島の西側の断崖沿いを泳いだ。突き出した断崖の先端部に人間が立っているシルエットを月明かりが映し出していた。

同じホテルに宿泊している看護婦であった。髪型や身のこなしからそれとしかれた。看護婦は断崖を行ったり来たりしていた。そうして、靴を脱いで、断崖から海へと投げ捨てて、いよいよ身投げしようとしていた。

おれは急いで海面に顔を出している小さな岩に立ち、伸びをして、看護婦を見上げた。

「おーい！」と大きく腕を振った。「ここいらの海は深いですから、飛び込んでも死ねませんよオ！　泳げなくてもおれが助けちゃうから無駄ですよオ！」と声を張り上げて叫んだ。

看護婦はびっくりしたみたいに断崖に尻をついて、這うようにして去っていった。

大急ぎで前浜まで泳いだ。オンちゃんはおれの姿を認めると、

「慌てているけど、何かあったの？」

と心配そうにおれの顔を覗き込んだ。

おれは事情を話しながら服を着て、自転車にまたがった。オンちゃんといふ島全体を一周して看護婦の姿を探した。息が切れていた。

「遅かったか」

二人はうなだれたまま、ホテルのロビーに戻った。するとさっきの看護婦が、ソファアに坐って、足の裏に薬を塗っていた。おれたちは看護婦の向かいのソファアに腰を落とし、しばらく黙っていた。看護婦は足を組み、頬杖をついて、無言で何やら考えを巡らせているようだった。

廊下の奥から爺ちゃんがサンダルと包帯を持ってきて、

「羽幌に着いたら、新しい靴を買うといい」

「ご迷惑かけてすみません」

と初めておれたちに頭を下げて、また黙り込んでしまった。古い柱時計の時を刻む音が耳をついていた。看護婦は組んでいた足を入れ替えて、堰を切ったように話し始めた。

話の内容はこんなふうだった。

彼女は七ヶ月前、婚約者と別れた。高校時代から交際をつづけていた、最愛の男性だったそうだ。彼に好きな女性が出来て、……世間ではよくある、ありふれた話に過ぎなかった。しかし打撃は相当なものだったらしい。

その後、不眠がつづき、勤務先の病院でもらった抗鬱剤など服用したが無駄だった。仕事を辞めて、彼女は自宅のマンションで、深夜、睡眠薬を大量に飲んで、自殺を計った。錠剤をウイスキーの水割りで無理やり流し込んで、ベッドに横たわった。その時、チャイムが何度も鳴って、乱暴に玄関のドアを叩く音と、男性の怒鳴り声が聞こえてきた。あまりにしつこいので、彼女はふらふらと起き上がって玄関のドアを開けた。怒鳴っていたのは、彼女の部屋の真下に住んでいる見覚えのある中年の男性だった。

「うちの部屋の天井から水が漏れている。この夜中に何を考えてい

るんだ！　風呂の水でも出しっぱなしにしているんじゃないか」
ちょうど薬が回ってきて、怒鳴っている男性の姿が、ゆがんで見えたところまでは覚えていた。男性の通報で病院に運ばれた。胃洗浄をされて、一命をとりとめた。水漏れの件も、あとから大家が調べたら、下の住人の屋根裏を通っていた水道管が古くなって破れていたとの話であった。

今度こそ確実に死のうと思い、真夜中、マンションの近くの線路へと歩き始めた。遮断機が上がった線路沿いで、もうすっかり心を固めて、電車が通るのを待っていた。

「真奈美ちゃんじゃない？」

振り向くと、もう十年近く会っていなかった中学校の頃の親友の女性が車から降りてきた。

「やっぱりマナヤンだ。懐かしい！　こんな夜中に会うなんて」

それから強引に車に乗せられて、二人は近所のファミリーストランで中学校時代の思い出ばなしに花を咲かせた。彼女の冗談に思わず笑っているうちに、死のうという決心がすっかり萎えてしまった。

彼女は学生時代から何度か訪れていた北海道の天売島を思い出した。天売には、切り立った断崖が幾つもあること回想して、断崖から飛び降りたら本当に間違いないだろうと信じた。それが今夜……、なんと、海の中の岩に、全裸の青年が立っていた。「死ぬませんよオ」とだけ切れ切れに聞こえてきた。彼女は驚いてしまって、今度もやっぱり、死ぬなかった。

三度、死のうとして三回とも、妨害が入って目的を果たすことが出来なかった。三回つづけて邪魔が入ったのは、とうてい偶然とは思えないと彼女は言った。この世には科学では計り知れない何かの働きがある。人間を殺そうとする働きもあれば、生かそうという見えない力も断じて存在するんだと、今夜、確信したそうである。

「きっと私には、よく解らないけれど、大切な役割があって、それをまだ果たしていないでしょう。不思議なことが三回もつづい

て、ああ、見えない何かに導かれているんだなアと、ひどく感動しています。私は非科学的なものを信じてはおりません。ただ、目には見えない、たくさんのお働きが日々、こんな私のことを常に見ていてくれている。それを今夜、実感しました。もう自殺を計ることは二度とありません。皆さん、ご心配をかけて申し訳ございませんでした」

看護婦は話を終えたとおれを見て、

「あなたは命の恩人ね。忘れないわ」

決然として立ち上がり、

「これから、生まれてきた役割を探します」

というなり頭を下げて自分の部屋へと戻っていった。柱時計の時間を刻む音が再び聞こえ始めた。しばらくみんな黙り込んでいた。爺ちゃんが、

「俺にも体験がある。人の生き死にが、かかった場面では、不思議な偶然が重なることが多い」

おれは部屋に戻った。窓が開いてオンちゃんがまた入ってきた。

二人は朝まで、裸で抱き合って眠った。

朝食と昼食を兼ねた食事をとってから、またベッドに潜り込んだ。疲労が溜まっていた。夕方まで、ぐっすりと眠った。

「行くよ」

オンちゃんに起こされて、窓外を見た。空が赤く染まり始めている。自転車で赤岩展望台近くの崖に向かった。到着すると、既にウトウの帰還は始まっていた。西の空が遠く、ウトウとカモメの群れで黒ずんでいた。

「結婚してからも、夏は毎年、会いに来るからね」

と、オンちゃんは海鳥の群れに呟いた。

オンちゃんの立ち姿がスロモーションのように見えてきた。年々、幼さがその表情から消えて、少女から大人へと変身しつつあった。ピンクのブラウスと白いキュロットスカートの二十歳のオンちゃんが、虚ろに遠くを見渡す視線でウトウの乱舞を追いながら、前

髪をかきあげた。

弾けるような希望に溢れた肢体と眼孔に少しずつ、妖光が差し始め、体型は成熟した女のものとなった。

胸元の開いた薄紫のワンピースに身を包んだ二十五歳の彼女は顎を引いて、覗きこむようにウトウトとカモメの攻防を見ていた。

瞼の下に隈が出来始め、ふっとこちらに振り向いた。

艶めいた妖しい表情に、ぱっと昔の清潔さが蘇った時、彼女は三十歳を超えていた。

折にふれて、複雑な感情を内包しながら、いくつもの表情を使い分けることのできる大人の女へと変貌を遂げていた。

「爺ちゃん、春から夏に向かう一番いい季節に死にたいって言うていたわ。夢が叶って良かった」

喪服姿の女が言った。三十歳を超えているのに二十代後半にしか見えなかった。貞淑でありながらも妖艶な色香を同時に兼ね備えた妻は、まさに女盛りを迎えようとしていた。もうじき三歳になる健太がエゾカンゾウの黄色い花を一輪持って、走り寄って来た。彼女は花を受け取るとお愛想程度に健太をあしらい、邪魔くさそうに、夕空の断崖へと投げた。花を追いかけようとする健太を、おれは慌てて抱き上げ、

「まさか抵当に入っていたとはな、あのホテル」

「爺ちゃん人がいいから、いろんな人の保証人になって……。困ったことになったわ、うちも苦しいのに……借金も相続してあげられないわねえ」

と言った。

それから親子三人は、海鳥の消えた天売の夜の空を眺めた。

四（前書き）

完結話

四

夕方から突風が断続的に吹き荒れていた。女の子の顔の描かれた赤いアドバルーンは突風の切れ目を縫って下ろした。網をかけて固定した。男の子の青玉に取りかかった頃には既に夜であった。

青玉は風に吹かれて水平以下まで落ちていた。上げロープが、電線すれすれにまで接近していた。ロープを握りしめたまま、じっと我慢して、風の切れた瞬間、一気にアドバルーンの根元まで、青玉を手繰り寄せた。看板の網が右足に絡まっていた。強烈な突風がやって来て、軍手の中でロープが滑った。右足首を網に取られて、おれの身体は瞬間、空中に浮き、左肩から落下した後頭部をヒーターの入ったコンクリに打ちつけた。

尻をついた姿勢のまま、ロープを握りしめ、再び風の切れ目を待った。右手を見ると、遠くで、地下鉄のシェルターの中を風の流れと逆方向に、電車の光が走っていた。それは強風にも闇の深さにも左右されない、一直線にひた走る不思議な光だった。ようやくアドバルーンの根元をタイガーロープに縛って網を掛けて固定した時、後頭部の生温い感覚に気がついた。コンクリに、ぽたぽた血液が滴り落ちていた。おれは急いで、首に巻いていた日本手拭いを、頭に巻きつけた。

カローラに戻った。健太が心配して、日本手拭いに手を当てて、いたい、いたい、と言った。

カローラを発進させて、平岸街道を北上した。フロントガラスに大きな鳥がぶつかりそうになり、羽を広げてばたつかせながら車を避けて闇に消えた。おれは急ブレーキを踏んで、路肩に車を停めた。ハザードを点灯させた。

「鳥、見えたか？」

健太は何のことやら解らないらしく、首を横に振った。

「来たか、ついに」

車に衝突しそうになった大きな鳥は、カモメの幻覚であった。

平岸街道を真っ直ぐ進むと、左手に出身の学園の建物が見えて来た。正門に左折して、警備員に挨拶してから、わだつみ像の手前の駐車スペースに車を停めた。雪は降っていなかったが風が強かった。全裸のわだつみ像は緑色の全身の肌に冷気を帯びながら、震えもせず、台座の上に佇立していた。

寒風の中、手袋もつけずに、わだつみ像に手を合わせている老女がいた。今にも風で飛んでいってしまいそうな、小柄で痩せた老婆であった。頭には茶色の頭巾を巻いていた。見たところ、八十歳をとうに超えていた。皺くちやの顔の中で眼鏡ごしの両眼は聡明であり、力の抜けた優しい雰囲気醸し出していた。二人でしばらく、わだつみ像を黙って見上げていた。老婆はおれに話しかけるでも、わだつみ像に話しかけるでもなく、独り言のように、

「去年、副腎を一つ取ってしまったて、もう一つの副腎も、ほとんど動かなくなってきたようなんです」

と呟いて、ハンドバックから、のど飴を取り出して健太の口に含ませた。

「この学園のご出身ですか」

「はい」

「主人もこの学校の出身でした。平岸のお寺の次男だったのですが、南方に出征して間もなく、……骨だけになって帰ってきました。籍を入れて、一緒にいられたのは、ほんの二週間でした」

老婆とわだつみ像の間を小さな鳥の幻が冷気を裂いて空中を通り過ぎていった。

「戦後間もなく、後を継ぐ筈だった主人の兄が結核で逝ってしまつて、帰る所も無く、三男夫婦にお世話になりましたが、主人に、もうじき再会出来そうです」

おれは一方的に話す老婆が幻覚か亡霊に思えてきて、健太を抱き上げ、婆ちゃん、いるか、と耳元で囁いた。

「いる、いる」

健太は飴を頬張りながら何度も首を縦に振った。

「働き詰めの人生でしたが、その分、精進だけは人一倍させて頂きました。弟夫婦に感謝しております」

そうしておれの頭に巻いた日本手ぬぐいとドカジャンの肩についた血液の染みに気づいたのか、

「ただならぬ、ご様子ですが」

「これは……こんなのは大したことではありません。おれは、借金と助からない病気とで気がおかしくなっています。幻覚さえ、見えるのです」

わだつみ像を見ながら、昨日の虚無僧が勝手な意識をした「病者の祈り」を思い出していた。老婆にその内容をかいつまんで説明をし、

「本当の自分自身って何だと思いますか」

と訊いてみた。

老婆はしばらく考えた後、

「いのち、そのものだと思います」

「いのちって、何なのでしょうね」

「水のように流れていく、それがいのちです。どこに流れても、どこにあっても形は変われど水は水なのです。それが解れば、今、あなたがどんな苦境に立っているようが、苦しみは無くなると思います。わかる、と、かわる、は等しいのですよ」

「わかる、と、かわるは等しい……」

老婆の言葉を反芻してみた。

「実は悪性の脳腫瘍で医師から余命を告げられています。わかれば、かわる……わかれば、治りますか」

行きどころの無い感情が湧いてきて、おれは老婆にすがった。

「治っても治らなくても命のことがわからなければ、かわらないのです。死んでいても生きていても、命はいのちです」

カモメが老婆の頭上を旋回し、舞い降りておれと健太の間を走り過ぎて行った。その羽音を聞いた時、無性に怒りがこみ上げてきて、

「みんなして、わけのわからないことばかり言うのはやめてください。望んでいない死を迎える人間の気持ちなんか解ってたまるか、おれは死にたくない、死ぬのが恐いんだ」

おれは踵を返してススキノへと歩を進めた。金は無いいし、頭には血だらけの日本手ぬぐいを巻いていた。顔は腫れ上がり、青アザが出来ていた。地下鉄に乗らず、健太を抱いて徒歩で歓楽街へと向かった。

南九条大橋にさしかかった。

橋の欄干には、両側に何百羽ものカモメが停まっていた。

豊平川の向こうのススキノは、ここから見ると、まるで極彩色のデコレーションを施された光を放つ孤島であった。孤島の上空を、何千羽もの鳥が、様々な光を放ちつつ旋回していた。健太を降ろして孤島の彩色の中へと足を踏み入れた。

駅前通りを北に向かって歩いた。

鴨かも川の橋にさしかかった頃から、雪がちらつき始めた。おれは橋の欄干に背中をもたせかけて、川を見た。鴨かも川はススキノの南方面を、南西から北東へと斜めに流れる、コンクリートで固められた、細く浅い川だった。川面は凍りついて、四メートル幅の黒い凍りついた道を粉雪が渦を巻きながら走っていた。その上空を飛んでいるのは、夏場に見かける鴨とは別の数百羽の鳥であった。

「二回目からは慣れる」

おれは昔の天売島での妻の言葉を頼りに、燐光じみた青い光を引きずる川の鳥から目を逸らせた。とりどりのネオンの採光を目にした健太が条件反射のように口に手を当てて、

「ぞうさん」

と、ねだった。

おれは習慣みたいに歌い始めた。目の前を猛スピードで横切って行った鳥は、瞬きするだけで無視できた。おれの容貌と、大声で歌う「ぞうさん」に、通行人が道を空けて、露骨に避けているのが解った。おれは萎えて崩れそうになる意識に鞭を振るうように、さら

に声を張り上げて歌いつづけた。

ぞうさん

ぞうさん

だれが すきなの

あのね

かあさんが すきなよ

目的地のビルが見えてきた。通りを挟んで向かい側の喫茶店から、ヒキガエルが姿を現した。

「また喧嘩でもしたのかい？」

「現場で転んだんだ」

「それにしてもひどい顔だぞ、随分めかし込んでるし、びっくりしたでや」

「とうとう、最期らしい」

「どうした？」

遠くの通りを虚無僧が歩く姿が見えた。編みがさを前に傾け、足踏みしながら過ぎて行った。おれはヒキガエルに尋ねた。

「虚無僧、見えるか」

「虚無僧？ 見えたぞ。そう言えば最近よく見かける。あいつら、普段は普通の勤め人で、週末だけ虚無僧になるんだよ。それにしても真冬の虚無僧はあいっただけだ。一人で何やってんだべ？」

おれは、虚無僧が通り過ぎて行った道の上空を指差した。数十万羽の海鳥が、金色や銀色に発色しながら、降って来る雪の中を飛び交って、ススキノ全体を覆っていた。ネオンの光に照らされていたいにもかかわらず、雪の見えない高度にも無限の光は乱舞していた。「空を鳥の大群が舞っているのが見える。幻覚が酷くなっている」

「ぞうさん、気を確かにもて」

「それが案外、平気なんだ。天売島で鍛えたからな。もう慣れたよ」
「ぞうさん……」

おれの肩を抱えようとするヒキガエルを制して、

「幻覚が見える以外はいたって普通だ。大丈夫」

S u g e r 倶楽部の受付けには、今日は蜘蛛男だけが坐っていた。ビルの中には鳥は一羽も見えなかった。

「待ってましたよ」

おれは蜘蛛男に頭を下げて、表情だけで入ってもいいかと尋ねた。

「すみません。あんまり電話が鳴らないし客も来ないので、ちさとさん怒ってジカビキにいっちゃいました」

蜘蛛男は手早くメモ用紙に地図を書きながら、

「タチンボの時の彼女のシマがこの通り。使うホテルはいつもここ。どっちかにいます」

外に出ると雪が本降りになっていた。風はあいかわらず強かった。道を挟んで向かいの電信柱のてっぺんから、雪の塊が落ちて、それが電柱を伝い落ちて、途中で柱にバウンドした。

雪の飛沫がコートの襟を立てて歩いているホステスの顔を直撃した。

「いやだ」

と、うずくまったホステスの足元をウトウが奇声を上げながら駆け抜けていった。通行人や走り過ぎる車の上ではいたるところ何百ものカモメが舞っていた。地面では凍った路面を、無数のウトウが忙しげに翼をばたつかせて乱雑に動きまわっていた。

「どうさん、もう少しだ」

尋常ではない様子を察知したらしく、ヒキガエルはおれの肩を叩いた。

「まだ大丈夫。幻覚はひどくなっているが……」

「俺の背中だけ見てついて来い。何が見えても無視すれや」

ホテル街に向かって路地を折れながら南下した。上空の闇の中で、海鳥の群れが発色して火の粉のように舞っていた。火の粉が一斉に降下してきてウトウの群れに変わった。それがおれたちを直撃するように迫ってきた。ウトウの大群は三人の身体を通り過ぎて、地面

に着地する前に、次々と消滅した。

蜘蛛男の教えてくれたホテル街の通りに妻の姿はなかった。妻が使っているというホテルの前で待機することにした。赤く大きなハートマークが光っていた。その下で「Love hotel」の電飾文字が吹雪に透けて黄色く瞬いていた。通りには、オレンジや赤、黄色や青の派手な外壁のラブホテルが何十軒も軒を連ねていた。極彩色の様々な立ち看板や外壁に備え付けられたネオンの看板が、雪に包まれておぼろに道を照らしていた。どの看板にもカモメが停まっていた。

おれたちはハート型の看板のついているラブホテルの向かいの、建物と建物の間隙に入って吹雪を避けた。

「ここで待っていれば出てくるぞ」

とヒキガエルは言った。

健太を抱き上げて、健太の頬に自分の頬を合わせた。そして建物の壁に背中をもたせかけた。ヒキガエルも反対側の壁に背中をもたせかけて、パンチパーマに積もった雪を片手で払っていた。落ち着かないのか、片手を垂らしてブラブラさせていた。吹雪が二つの建物に遮られて、頭上からも、両端からも、ひゅうひゅうと音を立てていた。

「どうさん、目を瞑っていればどうだ？　人が出てきたら声かけるぞ」

ヒキガエルの勧めには答えず、

「それにしてもあんた、なんでここまで親切にしてくれるんだ？」と訊いた。

「……………」

ヒキガエルは黙ってジャンパーの内ポケットから、財布を出してそれを開いておれに差し出した。ビニールのカバーの中に写真が入っていた。三十歳くらいの精悍な印象の青年が、公園のブランコに乗りながら、三歳くらいの女の子を膝に載せていた。

「あんたか」

おれは驚いて写真の青年とヒキガエルの顔を見比べた。

「ああ、もとはゲーム屋よ。昔、ユーフォーキャッチャーのブームに乗って一儲けした。でかい本屋のチェーン店に全部、機械を置かせてもらってな。何十人も人、使っていたよ」

「青年実業家だな」

「三十くらいの時、一人娘が俺の目の前で交通事故で死んだ。まだ四歳だぞ。俺はそばにいたのに何もしてやれなかったんだ、なんも俺はそれから、何もかもやる気が失せて、取引先からもみはなされてな」

「そうだったのか……」

ハート型の看板の下の出入り口から、口論する声と共に人影が見えた。妻であった。髪はショートカットにして、ワイン色のロングコートを着ていた。道路に出ようとするおれを制して、ヒキガエルは、

「ホテルの従業員と、もめている」

と言った。

「あんたがどんな仕事したっていうのさ。こっちは身体はって客からお金もらってるんだ。なんでフロントに立ってるだけのアんたが客からチップもらうのさ」

「チップ、たって五百円玉一枚だぞ。子供の駄賃みたいなもんだべや」

「いいから、よこしなさいよォ！」

「なんだい、五百円ぽちでムキになって……。くれてやるよ」

従業員は歩道の雪の中に硬貨を投げ捨てて、ホテルの中に引き返して行った。飢餓に耐えかねた人間が食べ物の切れ端を拾うような勢いで妻は四つん這いになって雪を両手で掻き分けた。

ようやく見つけたのか五百円玉を中腰の姿勢で眺める妻の双眸が、通り過ぎて行く車のヘッドライトをもろに受けて、一瞬、緑色に光った。

「オン……」

おれは健太を抱いたまま道路に飛び出した。妻は歩道に膝をついたまま、恐れるようにこちらを向いた。妖艶な娼婦の表情が、清純な少女の驚愕に変わった。

「いやあッ」

と叫びながら、妻は駆け出した。おれは健太を抱いたまま追いかけた。後ろからヒキガエルが身体を揺すって走ってきた。

ホテル街を抜けて、鴨かも川沿いの道を一心不乱に走る妻にようやく追いついた。

「こっちから連絡するって言ったでしょうッ」

妻はおれの腕を振りほどき、更に走った。吹雪の中、数百の鳥が発色しながらおれと妻の間を舞っていた。

人気のない川沿いまで来て、ようやく妻をつかまえた。

「全部おれが悪いんだ。お前をこんなふうにさせてしまったのもおれの責任だ」

「もう遅いのよ。こんな姿を見られて、どうしたらお兄ちゃんの顔みられるっていうの！」

彼女はおれを突き飛ばして橋を渡ろうとした。おれはふらつき、川沿いの除雪車が残した雪山に背中を着いた。眼前を鳥が羽ばたいて通り過ぎて行った。おれは健太を雪山に坐らせて、橋を渡りきろうとする妻の肩に両手を当てて、

「脳腫瘍なんだ。おれはもうじき死ぬんだ」

妻は驚いて振り向いた。

「ママッ」

健太が鼻水と涙でぐちゃぐちゃになった顔で母を求めている。赤ざれた頬がそれに悲壮感を加え、表情の無い健太に表情をつくった。健太は危うい足取りで雪山の上を歩き、橋に近づいて来た。そして足を滑らせて凍りついた川に落ちてしまった。

おれは橋の欄干を乗り越え、川に飛びこんだ。健太は凍りついた川面の下に入り込んでしまっていた。氷を力の限り、叩き割ってみたが健太の姿はなかった。妻も川に飛びこんで来た。そうして飛び

散る水飛沫の中、獣声じみた叫び声を上げるおれの横で、

「あああああ！」

妻は狂ったように氷を割りつづけた。ヒキガエルも川に飛びこんで来た。おれと妻より三メートルほど川下の氷を割って、氷の下から健太を見つけ出して抱き上げてから立ち上がった。氷結した川面は、ヒキガエルの腰の高さにまで達していた。

「生きてるぞオ」

その声は力強く、おれの頭の中で何度も反響した。

最初に健太を抱いた妻がヒキガエルの肩を借りて、橋に戻った。つづいておれも橋に戻ると、ヒキガエルの手を取って、引き上げた。確かに健太には意識があった。何が起こったか判らぬ様子で、橋の上で膝をついている妻に抱かれていた。

「温めないと」

おれも膝をついて、ドカジャンのチャックを下ろして、健太を抱きしめた。妻も必死で健太を抱きしめていた。いつしかおれは妻の背中に手を回して、健太と妻の両方を抱きしめていた。妻とおれの濡れた頬と頬が触れ合った。健太を挟んで互いが互いにしがみついているうちに、妻の唇が偶然、おれの唇に触れた。吹雪の中で二人は、いつまでも唇を重ね合わせていた。川面から一斉に鳥の集団が舞い上がった。オロロン鳥だった。数千羽ものオロロン鳥は、青く光りながら、上空を乱舞し始めた。

「救急車じゃ間にあわねえ。ついて来い」

ヒキガエルに導かれるまま、駅前通りに出た。四人の様子を見て乗車拒否するタクシーが次々と通り過ぎて行った。ヒキガエルはタクシーに蹴りを入れる仕草をしながら、

「とみさんの店に行こう」

そう言えば昨日の老婆の煮込み屋はここから近い距離にあった。

駅前通りを北に向かって皆で懸命に急いだ。

ふと、駅前通りを挟んで反対側の歩道に虚無僧の立っている姿が見えた。乱舞する海鳥と吹雪を透かして、虚無僧の編み笠はおれた

ちの方を向いていた。息を切らせて立ち止まったヒキガエルに、おれは虚無僧を指差して、

「虚無僧、見えるか」

と訊いてみた。

「虚無僧だア？」

ヒキガエルは目を凝らして反対側の歩道を見た。

「虚無僧なんて、どこにもいないべや」

虚無僧は、おれたちにむかって手を振っていた。そうしてゆっくりと編み笠を外した。その顔をよくよく凝視すると、虚無僧の顔は、おれ自身の顔だった。腹の底から湧いた歓喜が強い痺れとなって断続的に頭蓋骨へと伝わった。頭の中が何度も真っ白になった。失神しそうになる光りと痺れであった。

「すぐそこだ」

とおれの腕を引くヒキガエルに、

「少しだけ、おれは……わかったのかもしれない」
と言った。

地下の煮込み屋には今日も客は一人もいなかった。ヒキガエルは財布から、取りずらそうに濡れた万札を出して老婆に渡したが老婆は黙ってそれを手で押し返した。妻は急いで健太の服を脱がせると、老婆から受け取った大きなタオルで健太の体を包み、やさしく摩りながら、毛糸のカーディガンを着せた。老婆は急いで、店内の暖房の温度を上げた。

「こんな季節に子供を泳がせでもしたのかい？ 本当に悪い大人達だね。もう大丈夫。水も飲んでないようだし、あとはあったかくしてりゃあ、落ち着くよ。あんたがたも、早く濡れた服乾かしな」
老婆の言葉でヒキガエルは上半身、裸になってカウンターに坐った。妻はコートだけ脱いで、座敷で寝ている健太の体を摩りつづけていた。

「あんたが奥さんだね？ これで身体を温めな」
老婆はカウンターの中から出て、妻に小ドンブリを差し出した。

「ありがとう」

妻は礼を言いながら小ドンブリの一カ所だけ小さく欠けた部分に口を当てて、汁を啜っていた。老婆はヒキガエルの横に坐った、おれを見て、意味あり気に微笑んだ。そうして、

「客が来たら困るね」

店の外に出て、暖簾を下げている影が、引き戸のガラスに映っていた。

間もなく暖簾を持って店に戻って来たのは桜色のロングコートを着た美しい若い女であった。昨日の夜、道端で健太に手を振りつけてくれた三日月目の女だった。

「母さんは？」

ヒキガエルは女を見知った様子で、老婆の居所を尋ねた。

「ちょうど入れ違いで、近所に煙草を買いに行きました」

おれは驚いて立ち上がり、店中に飾ってある女優の写真を見た。

女優の顔は今、カウンターに入ったばかりの女に瓜二つだった。

「娘さんだったんですか」

「美人だべ」

と言うヒキガエルに、女は照れたように瞬きして、

「昨日で仕事やめたのよ。いい経験だったけど、ホステスは性にあわなかったみたい」

「よく五年も頑張ったなア」

ヒキガエルに褒められ、

「前から言ってたでしよう？」

地下の店はもう卒業、今度は地上で

店を出すのよ、それが私の子供の頃からの夢だった」

「夢は叶いそうかい？」

「前から気に入っていた物件があったの。今日、不動産屋さん和契約してきたわ。小さい店だけど、母と二人でやるにはちょうどいいお店になります」

「オープンはいつさ」

「桜の花の咲く頃には……」

澁刺として語る美しい女の顔が、ぐにやぐにやと歪んで見えてきた。平行感覚が全く無くなって、おれは真正面に倒れた。顔面を床に叩きつけていた。

「救急車！」

「お兄ちゃん」

ヒキガエルと妻の声が遠ざかっていった。

わかっていたこととは言え、おれの寿命は尽きたようだった。病院のベッドで顔に白い布をかけられた死体の横で、オンちゃんはずくまって慟哭していた。

葬式は母と同じ平和の町内会館で行われた。母の時と同じように、アドバールン親方がコピーした、経をたどしく読んで、口ごもりながら何か言っていた。そうして情けなさそうに頭を下げていた。学生時代の仲間や、妻がススキノにすることを教えてくれた会社の元同僚、それから、ヒキガエルまで参列してくれていた。皆にお辞儀する妻の横では、健太が子供用の礼服を着て行儀よく坐っていた。健太と妻が一緒にいる姿を見るだけでおれは嬉しかった。参列してくれた一人ひとりの肩を叩いて、おれは心から、

「ありがとう」

と言った。

飾ってある写真は花に囲まれていた。借金まみれになる前の元気なおれが白い花の中で笑っていた。ヒキガエルは礼服を着て、かしこまり、正座して腹を突き出し、無理に顎を引いて息苦しそうに両手を畳に垂らして揺らしていた。

「その癖、なおらんべなア……、あんたには本当に世話になった」

ヒキガエルは火葬場にまで来てくれた。白くなったおれを見て、

「強い骨だなあ。まだ、形が残ってる。ぞうさんらしいよ」

箸で骨を拾いながら言った。

骨は骨壺に入りきらなかった。妻に代わり、骨壺に棒を差し込んで乱暴に骨を砕いている葬儀屋がいた。

「丁寧にやってください」

とオンちゃんは、食ってかかっていた。

それから……、

ヒキガエルは相変わらず背中を丸めて毎晩ススキノで客引きをやっていた。妻も蜘蛛男の店で売春して毎日をしをのぎつつづけていた。薄暗いホテルの一室で、妻の体にのしかかり、背中や尻の筋肉を波打たせている見知らぬ男の映像が見えた。生きていてくれればいい。生きてさえいてくれれば……。おれは中有を漂いつづけた。

巨大な筒状の空間を急降下していた。鬱金色の光の中を煩悶しながら落ちていった。意識は混濁し、暗黒の澱みに引きずり込まれていった。煮えたぎるコールドールの海に溶けていき、コールドールの海は頭蓋におおわれた。存在しない筈の頭に激痛が走った。黒い液体が頭の中で沸騰していた。手足の感覚が、痙攣とともに蘇り、おれは重たい瞼を見開いた。光の洪水が押し寄せて来て、すぐに去った。

上体を起こして、両手で頭蓋を抱えて叫んだ。点滴の管が腕から外れて床に飛んだ。若い看護婦が慌てて近づいて来た。

「おれ、生きていますか」

「当たり前です」

「自分の骨をみたような……」

「夢を見てたんですね」

「生きているのは間違いないようです」

とおれは頭を抱えて看護婦に言った。この激痛と痺れは紛れもなく、現実のものであった。

「痛み止めの注射しますね」

ようやく痛みが薄らぎかけた頃、病室に見知らぬ女と幼児があらわれた。

背の高い緑色の瞳を持った美しい女と色白の男の子だった。太った中年男もやって来た。人相の悪い中年男は作業服を着ていた。胸に「札幌気球 有限会社」と刺繍が施されてあった。腹を突き出し

て両手を手持ち無沙汰に揺らせていた。顔の印象や立ち姿はヒキガエルを連想させた。

「ぞうさん、やっと話せるようになったか」

「ぞうさん？ あんた、誰だ？」

「なにィ？」

医者がやってきた。四十代後半の女医だった。眼差しや眉間に刻まれた縦皺から、威厳のようなものが漂っていた。

「昔、天売島でお世話になったわね。あなたに命を救われてから、間もなくアメリカに修行に発ったのよ。恩返し出来たわ」

「……………」

「この方がミラクルハンドの名医だよ。前にプリントわたしたべ？ 覚えてないのか」

とヒキガエルに言われ、

「自分が誰かも、解らない」

ほんとうに、おれは誰なのだろう？

女医は悔しそうに顔をしかめて片目を閉じた。

「やはり記憶喪失ね」

そうして額を自分の指で何度もつついて歩き回った。

「アポトーシス……。腫瘍が自然に小さくなる現象が起こっていたのよ。それで手術が可能になった。脳腫瘍のアポトーシスは稀に報告されている。今回は場所が場所だけに苦労したのだけれど……」

「記憶は戻るんですね」

と緑色の瞳の女が涙声で女医に尋ねた。

「残念ながら、……奇跡でも起こらない限りは……」

女医は言葉を濁して俯いた。

女は低く唸り、ハンカチ片手で子供を連れて、病室から飛び出して行った。

「誰ですか、彼女」

女を追って起き上がるとするおれをヒキガエルが止めた。それを女医が制して、

「何度か意識だけは戻ったのよ。それも覚えてないのね」
と言った。

ヒキガエルの肩を借りて窓外を眺めた。一面にタンポポの咲いている中庭に、緑色の瞳の女がうずくまっていた。さっきの三、四歳の男の子がタンポポを取って女に渡していた。女はタンポポを受け取り、男の子の頭を優しく撫でていた。男の子の顔に満面の笑みが溢れた。

「あんたの女房と子供だよ」

と言いながらヒキガエルは二人に手を振った。おれも手を振ってみた。男の子がこちらに気づいて笑顔で見上げていた。母子は病院の建物に引き返した。

ヒキガエルは陽光を浴びて輝くタンポポの庭を見渡しながら、
「みんな夢だったんだよ。今年の冬のこと。ぜんぶ夢だった。それで決まり」

と笑った。

母子が病室に戻って来た。

おれをベッドに戻して、ヒキガエルは、

「命あつての、ものだねさ。なんせかんせ、助かったことだけでも感謝しないと罰当たるぞ」

ウインクしておどけてみせる言葉を受けて緑色の瞳が眩いた。

「そうよ。お兄ちゃん……。本当は死ぬところを先生に助けてもらったのよ」

と初めて表情を崩して笑顔になった。その女と、男の子、人相の悪いヒキガエル……。笑みを湛える見知らぬ人々をおれは真剣な眼差しで見つめて、

「おれはまだ、冬の中にいるらしい」

と言った。皆の顔から笑いが消えた。神妙な面持ちになった彼らを見て、女医は窓辺に歩み寄って窓外を眺めた。

「でもね……」

と呟いたきり、黙り込んで、しばらく外を見ていた。

男の子がポケットからタンポポを一輪取り出して、笑顔でおれに手渡してくれた。

女医は皆の方に振り向いた。悪戯っぽい顔をして、息をのんで彼女の言葉を待つおれたちにこう言った。

「でもね。冬は必ず春になるものよ」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2566t/>

冬の惑星

2011年5月14日14時25分発行